愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 146 集

高木遺跡

2007

（財）愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第146集

たかぎいせき

高木遺跡

2007

（財）愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県丹羽郡扶桑町は、木曽川をはさんで岐阜県と接する北部の町です。扶桑町の名前は、往時養蚕が主な産業で桑畑が多く、「桑によって扶養される町」に由来しています。ですから、近年は名古屋市のベッドタウンとして宅地化も進んでおりますが、現在でも守口大根をはじめとして農業が盛んな町です。

また、『続日本紀』にみえる県主前刀連（さきとのむらじ）の名前の由来は扶桑町斎藤（さいとう）と考えられ、17 世紀中頃には扶桑町高木において多くのキリシタン殉教者を出すなど、数々の歴史を有する町です。

しかし、扶桑町では、古墳や石器、土器などが確認されているにもかかわらず、これまで本格的な発掘調査が行われたことはありませんでした。このたび愛知県建設部道路建設課によって、県道草井羽黒線道路が改築されることになり、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて委託をうけ、事前調査を行いました。その結果、古墳時代から近世にいたる遺構や遺物を検出することができ、扶桑町をはじめとした地域の歴史に新たな資料を提供することができました。

これらの調査成果を本書に掲載することで、地域史研究に寄与し多くの方々に活用され、ひいては埋蔵文化財保護につながっていくことを願ってやみません。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり、各方面の方々にご配慮を賜り、関係者および関係機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚くお礼申し上げます。

平成 19 年 3 月

財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長　　林　　良　三

例　言

1. 本書は愛知県丹羽郡扶桑町に所在する高木遺跡（たかぎいせき：県遺跡番号 240013）の発掘調査報告書である。
2. 調査は県道草井羽黒線道路改築事業に伴う事前調査として、愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査対象面積は 3,550 ㎡である。
3. 発掘調査は平成 15 年 7 月～ 11 月、および平成 16 年 4 月～ 5 月に実施し、整理および報告書作成作業は平成 17 年 10 月から平成 18 年 3 月にかけて実施した。
4. 現地における発掘調査は、石黒立人（主査）・藤岡幹根（主査：現小牧市立一色小学校教諭）・加藤博紀・武部真木（以上調査研究員）、中島　京（調査補助員）が担当して行った。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、扶桑町生涯学習課、愛知県建設部道路建設課をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の執筆は、加藤博紀、鬼頭　剛、武部真木が分担し、編集は加藤が行った。
   第 1 章 1（鬼頭）、第 1 章 2・3・4（加藤）、第 2 章・総括（武部）、付論（加藤）
7. 整理作業は武部真木が担当した。作業にあたっては下記の方々、関係機関の助力を得た。
   山口典子（研究補助員）、服部里美、山田有美子（以上整理作業員）
8. 本書に示す座標数値は国土交通省に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。ただし表記は旧測地系（日本測地系）とした。
9. 遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理を行った。
10. 写真および図面などの調査に関わる記録類は、愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
    （財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
    〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802 番 24（ 0567-67-4161）
11. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
    〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802 番 24（ 0567-67-4164）

目　次

第１章　調査の概要

1　高木遺跡周辺の地形・地質・・・・・・・・・・・・・・・1
2　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
3　扶桑町の近世村落・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
4　調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

第２章　遺構と遺物

1　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
2　古墳時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
3　古代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
4　鎌倉・室町時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
5　その他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

総　括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

付　論　農作業における痕跡の観察・・・・・・・・・・・・・36
―扶桑町のイモアナ・扇状地における根菜類の保存方法の事例報告―

図版１～６
写真図版１～８
報告書抄録

CD-ROM 内容目次

報告書 PDF データ
遺構一覧表

挿図目次

図 1　高木遺跡調査地点位置図・・・・・・・・・・・・ 1
図 2　高木遺跡調査地点周辺の等高線図・・・・ 3
図 3　高木遺跡 03B 区の深掘層序と
放射性炭素 (AMS) 年代値・・・ 4
図 4　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
図 5　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
図 6　SZ01 溝断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
図 7　溝（SD）断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
図 8　集石（SX01）平面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 21
図 9　03A 区北東壁 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
図 10　03B・C 区北東壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
図 11　03D・04 区北東壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
図 12　古墳時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図 13　古墳時代・平安時代の遺物・・・・・・・・・・ 26
図 14　平安・鎌倉・室町時代の遺物 (1) ・・・・・・ 27
図 15　平安・鎌倉・室町時代の遺物 (2) ・・・・・・ 28
図 16　近世の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
図 17　主要遺構配置図　古墳時代・・・・・・・・・・ 33
図 18　主要遺構配置図　古墳時代末・・・・・・・・ 34
図 19　主要遺構配置図　平安時代以降・・・・・・ 35

挿表目次

表 1　『寛文村々覚書』からみた
扶桑町の村々・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
表 2　『寛文村々覚書』と『尾張徇行記』の
扶桑町におけるデータの比較・・・・・・・ 12
表 3　『尾張徇行記』における
扶桑町の近世農耕の様子・・・・・・・・・・・ 13
表 4　調査工程表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
表 5　遺物一覧 (1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
表 6　遺物一覧 (2) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
表 7　遺物一覧 (3) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

第１章　調査の概要

１　高木遺跡周辺の地形・地質

高木遺跡は愛知県丹羽郡扶桑町にあり、愛知県の北部で名古屋市からは約 17km 北へ隔たった場所にある（**図 1**）。調査地点は扶桑町大字高木にあり、木曽川が伊勢湾にそそぐ河口から約 57km 上流部に位置している。その木曽川は長野県の御嶽山に源流を発し、岐阜県南部を通って伊勢湾に流れこむ。伊勢湾へと流下する間には美濃帯の砂岩や泥岩、チャートを主体とする中・古生界や、後期白亜紀～古第三紀の火成岩類、鮮新統～完新統の火砕流堆積物・玄武岩類・安山岩類など、さまざまな岩石が分布する地域を流れくだってくる。これらの岩石は固結度が高く河川の浸食に対する抵抗力もつよいため、そこを流下してくる木曽川は狭長な河川流路となっている。ところが、それまで狭長であった流路は、扶桑町から北東におよそ 4km の愛知県犬山市と岐阜県各務原市鵜沼付近において河川流路の幅が広くなり、水深が浅く、勾配が緩くなるために堆積作用が生じ、砂礫を堆積させるようになる。このため、愛知県犬山市から南西方向に扇形にひろがる半径約

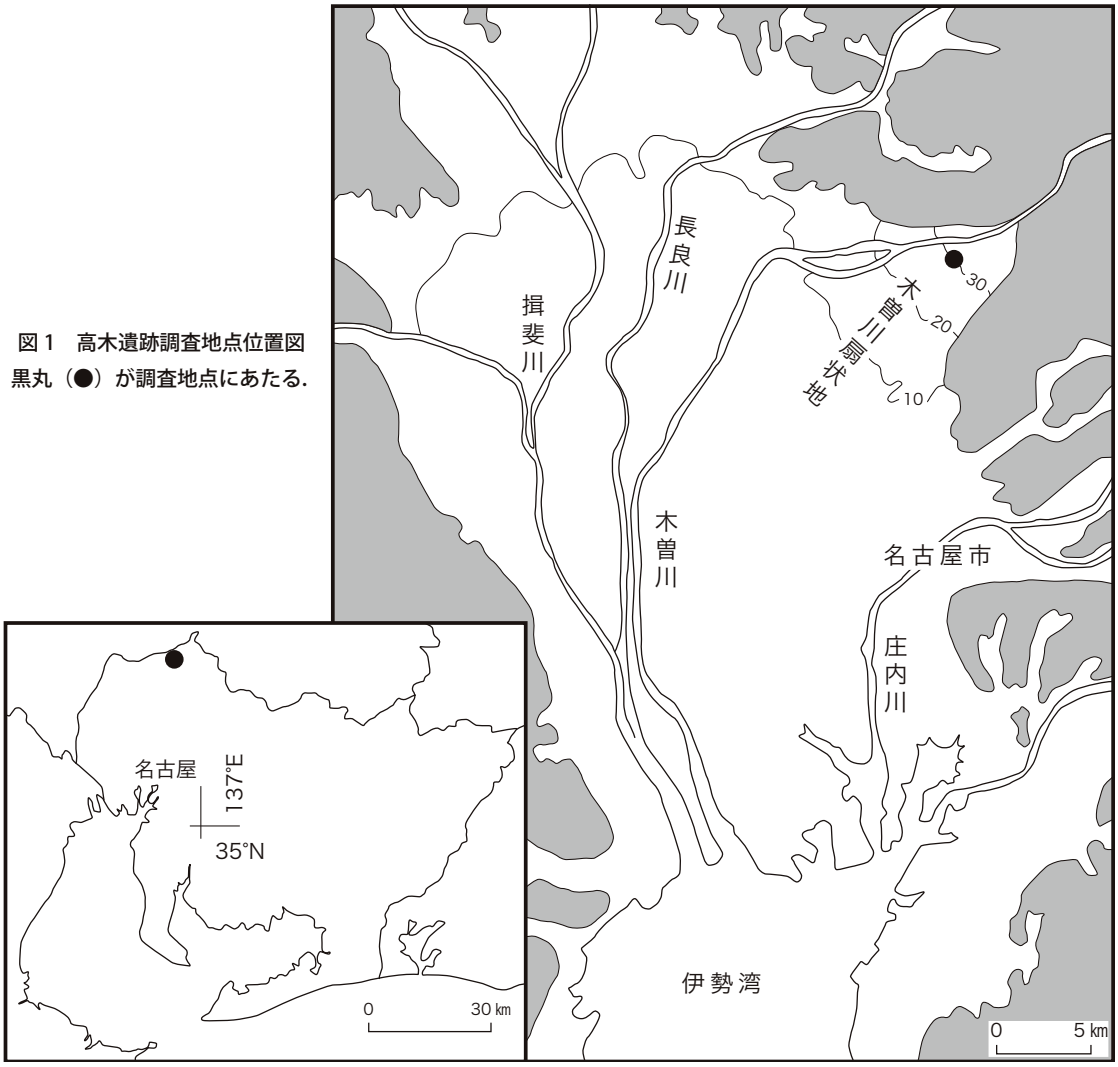


図１　高木遺跡調査地点位置図
黒丸（●）が調査地点にあたる.

12km で標高約 10m までの木曽川扇状地（あるいは犬山扇状地ともよばれる）を形成している。扇状地の形は一般に、谷の出口を扇状地の頂点とした同心円状のゆるい勾配の円錐形をなす。扇状地はその頂点から扇頂、中央部分を扇央、下流端の部分は扇端とよばれ、調査地点は標高約 30m の扇頂部分にあたる（**図 1**）。

筆者はさらに詳細な地形解析を行なうために調査地点周辺の等高線図を作成した。作成には扶桑町発行の 1/2500「扶桑町都市計画基本図」にプロットされた標高値を用い、等高線図を作成した。等高線図上には愛知県教育委員会 (1986) を参考にして、調査地周辺の主要な考古遺跡もプロットした（**図 2**）。作成した等高線図をながめると、調査地域には明瞭な谷と尾根地形が現われる。解析範囲には北東から南西方向へのびる標高 28m から 35m までの谷地形が 3 つ認められる。それらは北から現在の般若用水、丹羽用水および青木川が流下する場所にあたっている。ところで、今でこそ木曽川の流路は強固な堤防で流路を固定され、強制的に流路幅を規制されているが、現在のような位置を流れるようになったのは慶長 15 年（1608 年）に始まる木曽川の築堤工事が行なわれてから以降のことである。それ以前には木曽川から分岐して南西方向に支流が流れていた。古文書から、木曽川扇状地の扇頂付近から北東から南西方向へいく筋もの河川が流下していたことがわかっており、それらは東側から一之枝川・二之枝川・三之枝川・黒田川とよばれていた（扶桑町 , 1976; 大口町史編纂委員会編 , 1982; 大矢 , 1993; 江南市史編さん委員会編 , 2001 など）。これらのうち、岐阜県編 (1953) の「岐阜県治水史」や宮田用水土地改良区編 (1988) の「新編宮田用水史」を参考にすると、一之枝川が現在の木津用水、二之枝川は江南市般若町付近から南へ流下するとの記載があり、筆者の行なった地形解析で現われた谷地形のうち、標高 29m ～ 35m に認められた谷地形は、一之枝川から分岐する支流に相当するものと思われる。

高木遺跡の調査地点はそれら谷地形のうち、現在の丹羽用水と青木川が流下する場所にあたっている谷とに挟まれた幅約 500m で、北東から南西方向に向かうローブ（舌）状地形の北西縁辺部に位置していることがわかる（**図 2**）。また、調査地点のローブ（舌）状地形の北西は急崖をなし、南東は標高 32.6m から標高 32.8m に小規模な平坦面が確認できる。

ところで、木曽川扇状地から伊勢湾にかけての広大な範囲は、濃尾平野とよばれる沖積低地である。沖積低地は地質学的には完新世の堆積物からなる。完新統堆積物の呼称は地理学や地質学の各分野ごとにその名称が変わる。地理学では堆積物の粒子の大きさをもとに分け、下位から基底礫層、下部砂層、中部泥層、上部砂層、沖積陸成層の 5 つの層に区分されている。地質学ではそれらのうち、基底礫層と下部砂層までを濃尾層、中部泥層・上部砂層と沖積陸成層を含めたものを南陽層とよんでいる。高木遺跡の調査地点周辺の表層には上部砂層と沖積陸成層、地質学でいう南陽層が分布しているとされるが、扇状地地域での詳細な層序記載は少ない。そこで、高木遺跡の地下層序解析のために遺構検出面よりバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、層序断面図の作成と放射性炭素年代測定の試料を採取した。層序断面図の作成にあたり層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。また、層序断面からは放射性炭素年代測定に有効な木片や土壌を 3 試料採取した。なお、放射性炭素年代測定は加速器質量分析 (AMS) 法により測定を行なった。分析方法は 125 μ m の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。^{14}C 年代の算出には半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。^{14}C 年代の暦年代への較正には CALIB4.3 を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No. ; PLD) に依頼した。

ここでは高木遺跡 03B 区での深掘の結果を基

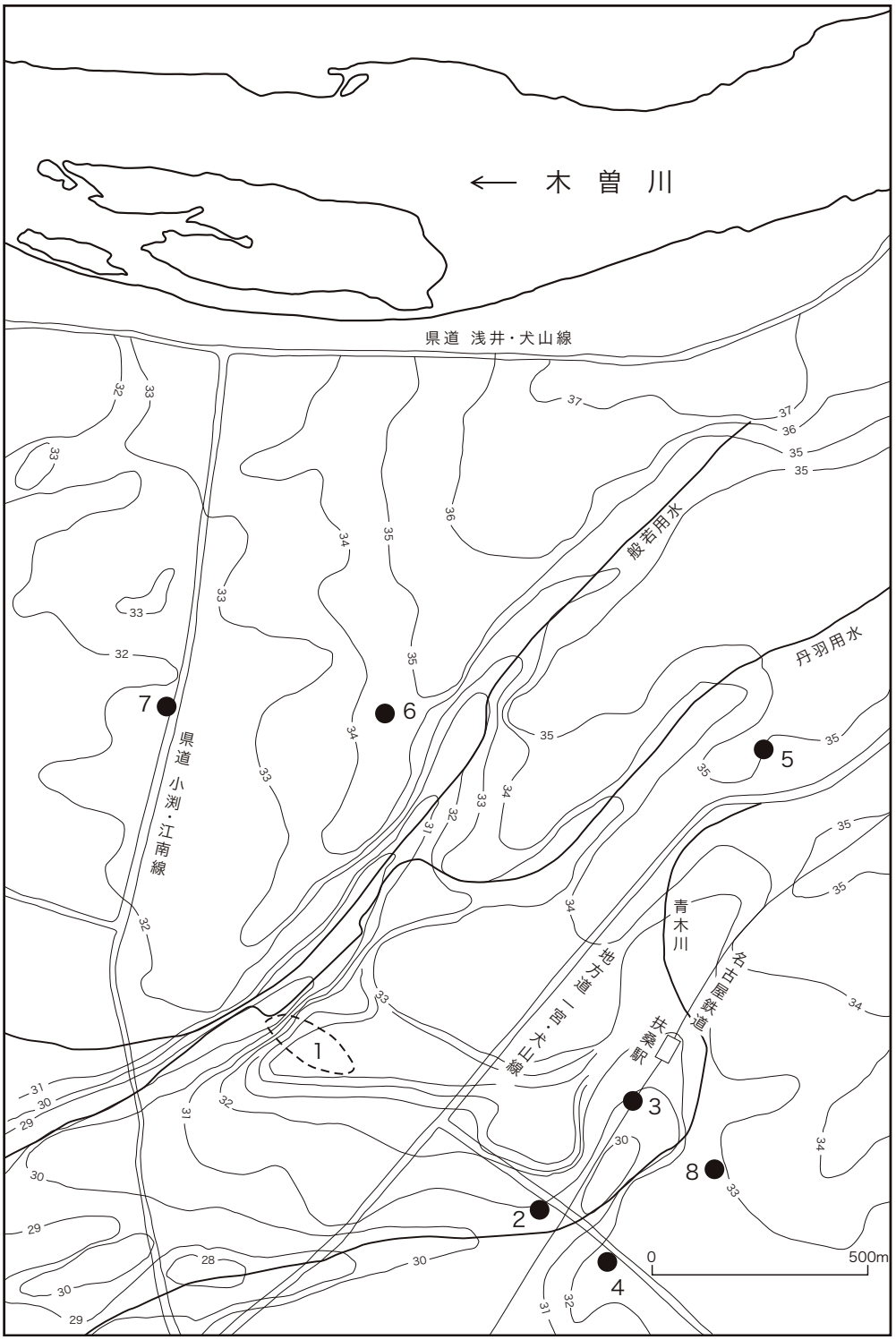


図 2　高木遺跡調査地点周辺の等高線図

1/2500「扶桑町都市計画基本図」の標高値を基に鬼頭が作成.

なお，局所的に高木遺跡の調査地点のみ標高 32m ～ 33m の間に 0.2m ごとの補助等高線を加えている.

1. 高木遺跡　2. 高木古墳　3. 畑尻古墳　4. 竹薮遺跡（弥生）　5. 伊勢帰遺跡（古墳）

6. 南山名東遺跡（中世）　7. 南山名西遺跡（中世）　8. 舟塚古墳

にして記載する（**図 3**）。標高 29.30m ～ 30.15m には中礫層で、亜円礫～円礫からなる極粗粒砂を基質とする基質支持礫層である。標高 30.15m ～ 31.30m はシルト質砂層で、砂粒子は中粒砂から粗粒砂サイズのものが多い。標高 31.30m ～ 31.90m は黒褐色のシルト質粘土層からなる。標高 31.90m ～ 32.80m は黄褐色かいし灰褐色を呈する砂質シルト層である。標高 32.80m ～ 33.30m は人工的な盛り土であり、本層 33.30m が現在の地表面となる。なお、標高 31.30m ～ 31.90m の黒褐色シルト質粘土層からは古墳時代の遺物が出土している。放射性炭素年代測定では古墳時代の遺物を出土する標高 31.30m ～ 31.90m のシルト質粘土層の下部（標高 31.31m）から採取した有機質土壌が 1920, 1910, 1900 cal yrs BP(PLD-2568) の数値年代であった（**図 3**）。いっぽう、標高 30.15m ～ 31.30m のシルト質砂層の下部から採取した木片（標高 30.16m）は 275, 175, 150, 10, 5 cal yrs BP(PLD-2569)、炭化物（標高 30.20m）は Modern(PLD-2570) であった。これらの試料は層理面に対して垂直に掘削された小動物の生痕跡と思われる堆積物から採取されたものであり、堆積後の二次的な撹乱の影響を被っている。

謝辞

本文を作成するにあたり、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボの山形秀樹氏にお世話になった。愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の石黒立人氏、加藤博紀氏，武部真木氏には考古学的な情報をご教示いただき、また加藤博紀氏には木曽川派川に関する文献検索の労を取っていただいた。図面のトレース作業では同研究補助員の神谷巳佳氏にお世話になった。分析試料の整理と図面の作成では同整理補助員の服部久美子氏、村上志穂子氏にお手伝いいただいた。以上の方々に記してお礼申し上げる。

文献

愛知県教育委員会 , 1986, 愛知県遺跡分布地図 (I)　尾張地区 , 36p.

扶桑町 , 1976, 扶桑町史 , 696p.

岐阜県編 , 1953, 岐阜県治水史　上巻 , 岐阜県 , 1003p.

江南市史編さん委員会編 , 2001, 江南市史　本文編 , 江南市 , 741p.

宮田用水土地改良区編 , 1988, 新編宮田用水史 , 1351p.

大口町史編纂委員会編 , 1982, 大口町史 , 952p.

大矢雅彦 , 1993, 河川地理学 , 古今書院 , 253p.

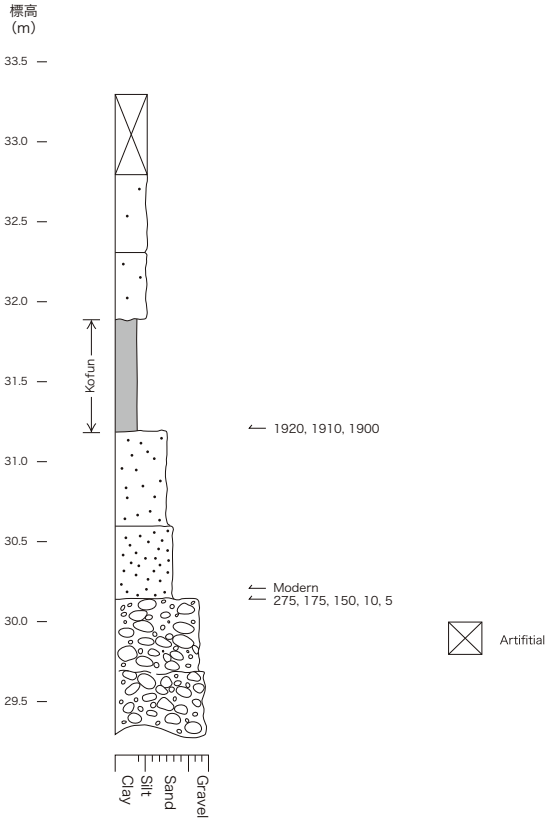


図 3　高木遺跡 03B 区の深掘層序と放射性炭素 (AMS) 年代値
^{14}C 年代は暦年代較正値 (cal yrs BP).

2　歴史的環境

高木遺跡が所在する犬山扇状地を概観する。

旧石器時代

入鹿池周辺遺跡（犬山市）・西山神Ｂ遺跡（大口町）などがある。入鹿池周辺遺跡は、表面採集だけで本格的調査はなされていない。遺跡全体からナイフ形石器・細石核・有舌尖頭器など多様な石器が採集されている。西山神Ｂ遺跡でもナイフ形石器や縦長剥片が採集された。

縄文時代

草創期の遺跡は、旧石器時代のもの同様台地上や扇状地東部の微高地にみられる。標高約20メートルの犬山扇状地の微高地上に狭間遺跡・中原遺跡（大口町）があり、中原遺跡では狩猟具と思われる有舌尖頭器が出土している。

早期の遺跡として、扇状地頂部の標高 40 メートルに立地する上野遺跡（犬山市）、扇央部付近から東端にかけて北替地遺跡・地蔵堂遺跡（大口町）・下林遺跡（扶桑町）があげられる。北替地遺跡は、1963 年にトレンチ調査が行われ、押型文土器や尖頭器などが出土した。なお、遺構は確認されていない。また下林遺跡でも押型文土器が出土している。

中期の扇状地の遺跡として、下林遺跡（扶桑町）・尾崎遺跡（犬山市）・西山神Ａ遺跡（大口町）・河原山遺跡（江南市）などがある。下林遺跡では、1963 年に発掘調査が実施され、中期後半の加曽利Ｅ式土器が主体となって出土した。尾崎遺跡でも加曽利Ｅ式系の土器が出土している。西山神Ａ遺跡の石囲土器炉から出土した土器は中期末葉に属する。また河原山遺跡からは中期後葉から後期にかけての土器が採集されている。

後期になると海退が進み、さらに晩期に入ると尾張平野の遺跡数は増加する。尾崎遺跡でも後期と見られる土器片が出土している。

弥生時代

尾張平野の登場した弥生人は、自然堤防帯の微高地に居住し、前期には扇状地帯を生活圏とすることはなかった。前期の終わりごろには、縄文的生活を続けていた尾張平野内陸部の人たちも弥生人の影響を少しずつ受けていったと思われる。前期の遺跡として、以下にあげる。西浦遺跡（大口町）では 1965 年の調査で、前期遠賀川式壷や前期樫王式壷・深鉢、東日本大洞系の鉢などが出土している。また、角畑遺跡（江南市）では前期樫王式条痕深鉢が採集されている。そして、地点は不明ながら扶桑町でも前期樫王式条痕深鉢が採集されている。

中期後半から後期にかけて、遺跡数は増大する。この時期の遺跡としては、中期の上野遺跡（犬山市）、中期末から後期にかけての向江遺跡（大口町）、終末期の仁所野遺跡（大口町）などがあげられる。上野遺跡は、貝田町式期～高蔵式期の竪穴住居などが確認された。これは、標高 40 メートルの扇状地の頂部という立地条件がどのような影響を与えたかを知るうえで重要である。向江遺跡は、高蔵式期～山中式期に属する竪穴住居２棟を確認しており、この地域における中期末から後期にかけての住居の様相を明らかにした数少ない事例である。仁所野遺跡は、廻間Ｉ式期の墓群の一端を明らかにした。仁所野遺跡や向江遺跡が属する大口町余野には、小銅鐸を出土した神明下遺跡などもある。このことから、扇状地帯では犬山市上野周辺や大口町余野周辺に拠点的な集落が形成されていたと推定される。この他に、後期から終末期にかけての竹藪遺跡（扶桑町）があり、後期山中式期から終末期廻間Ｉ式期にかけての広口壷・甕・高杯・鉢が出土している。

古墳時代

余野遺跡は弥生時代後期から古墳時代にかけて急速に発展していった。対岸にあたる仁所野遺跡では、３世紀初頭に墳丘墓が造営され、前方後方墳の可能性がある白山１号墳へと連続する。そして東之宮古墳（犬山市）が前期（4 世紀前半）に造営され、鵜沼地区の一輪塚山古墳・衣装塚古墳・坊の塚古墳が 4 世紀中ごろから後葉、青塚古墳群の盟主墓である青塚茶臼山古墳が 4 世紀第３四半世紀に造営されていった。

6 世紀にはいると、犬山市域は前方後円（方）

墳の造営をおおむね中止し、かわって江南市小折地区に大型の前方後円墳が集中して造営されるようになる。前方後円墳である曽本二子山古墳や富士塚古墳（江南市）、前方後円墳と思われる神福神社古墳、珠文鏡が出土した白亀塚古墳（大口町）などがあげられる。

また、扶桑町内を俯瞰すると、いくつかの古墳が確認される。それらはすべて後期のものである。愛知県指定史跡ともなっている長泉塚古墳は、円墳で径 30 メートル、高 3 メートルで低台地に立地し、周溝がめぐらされているとしている。他にも、船塚古墳（墳形不明で径約 13 メートル、高 3 メートル、副葬品の須恵器は 7 世紀前半）・高木古墳（円墳、現存せず）・元亀塚（直刀 1 振・須恵器の壺 4 器が出土）・畑尻古墳（直刀 2 振・須恵器の壺が出土）・樫の木塚（大刀・ 7 世紀前半の提瓶 1 器が出土）がある。さらに、『愛知県遺跡分布地図』にはないが、前刀神社は古墳の上に所在しているとして前刀古墳を『扶桑町史』で紹介している。どの古墳も考古学的調査はされていない。また遺跡としては、伊勢帰遺跡（明治 42 年に須恵器の甕などが出土）・柏森遺跡・高木遺跡（ともに土師器の破片が出土）がある。

古代

高木遺跡が所在する犬山扇状地に所在する古墳時代までの遺跡を概略してきた。古代からは、文献から知ることができる古代の丹羽郡を概略したい。

犬山扇状地の最初の支配者となったのが、「邇波県主（にはのあがたぬし）」である。「邇波県主」は、名の通り丹羽郡と密接な関係を有していたと考えられ、大縣神社（犬山市）の祭神が邇波県君祖大荒田命（にはあがたのきみのそおおあらたのみこと）であるように、大縣神社・田縣神社（小牧市）は邇波県の神を祀ったものと思われる。また、大縣神社の西方 3.5 キロメートルにある青塚茶臼山古墳はこの大荒田命を葬ったものとも考えられている。他にも「邇波県主」が文献に登場する例として、『続日本後紀』841(承和 8) 年の条に「右京人勘解由主典正六位上県主前利氏（さきとうじます）益賜姓縣連。神倭磐余彦天皇（神武天皇）第三皇子神八井耳命（かむやいみみのみこと）之後也」とある。『古事記』の神武天皇の段で「神八井耳命者、尾張丹波臣・嶋田臣等之祖也」とあり、前利連は尾張丹波臣と同じ祖をもつことから、前刀連は邇波県主と考えられる。県主前利連は、丹羽郡前刀郷にちなむと考えられ、前刀郷は、現在の扶桑町斎藤に比定される。ちなみに、扶桑町斎藤には式内社の前利（さきと）神社が存する。また、平安時代初期に完成した、神代～推古天皇までの歴史書『旧事記』には、「建稲種命（たけいなだのみこと）、此命邇波県君祖大荒田女子玉姫、為妻」とあり、邇波県君も「邇波県主」と考えられる。

次に文献に登場する例は、「村国男依」であろう。もともとは美濃の各務郡から尾張の丹羽・葉栗軍の一部を支配していた小豪族で、壬申の乱のときに大海人皇子側の将軍として活躍し、論功行賞でただ一人最上級で封戸 120 戸と連姓が与えられ、中央貴族の仲間入りをした人物である。彼の死の際に、大臣の冠位と推定される小紫位に地方豪族出身を示す「外」の字を付して、冠位が贈られた。

律令体制の完成とともに、郡・郷といった地方行政区分がつくられた。古代の丹羽郡は現代の犬山市から一宮市の一部にかけての一帯が相当し、高木遺跡の所在する扶桑町は古代では丹羽郡に含まれる。古代の丹羽郡にあった 12 郷のうち、現代の扶桑町には稲木郷（現代の江南市寄木郷・安良町から扶桑町柏森にかけて）・前刀郷（現代の扶桑町斉藤から江南市北東部にかけて）・下沼郷（現代の扶桑町下野？）が相当する。

さらに律令体制の変容とともに荘園公領制が形成されるが、尾張国衙から離れる丹羽郡は国衙領（公領）よりも荘園が多く存在したようである。現代の犬山市北東部から南部にかけてと想像される小弓庄は、丹羽郡司良峰季光が、990(正暦元) 年に法成寺に寄進して成立したもので、後に殿下の渡領として近衛家に相伝された。なお、良峰氏とは、桓武天皇皇子良峰安世の孫玄理が罪を犯し丹羽郡に下り、姓を椋橋と改めて郡司となったものと想像される。（良峰季光が直系かどうかは不明。）現代の扶桑町山那・南山名付近に存在したと推定される山名荘は、1066(治暦 2) 年藤原教

通が尾張国に散在する免田を仁和寺に寄進している。このうち丹羽郡分が平安後期に山名荘とよばれた荘園である。現代の江南市南東部から扶桑町柏森・大口町余野にかけて所在した稲木庄は、良峰氏の一族・立木田高光が長講堂領として寄進して成立した荘園である。平治の乱後、『吾妻鏡』に「当国 [尾張国] 之輩、悉以順平氏」とあるように、尾張知行国主･守となった平頼盛を通じて、平氏が尾張の在庁官人を家人とした。そして、平氏との婚姻関係を通じて立木田高光が丹羽郡中心部の肥沃地帯を長講堂領に寄進したものが、この稲木庄である。これ以降の良峰氏は、この稲木庄を確保することに汲々とすることになる。また、伊勢神宮の往古神領と称して伊勢神宮の荘園にあたる宅美御園が、現代の扶桑町または一宮市にあったとされる。

他にも、元来皇室の費用を捻出するために設定された公田である勅旨田が、古代の丹羽郡内には上東門院勅旨田・陽明門院勅旨田・後三条院勅旨田があった。このうち上東門院勅旨田を良峰季光が、陽明門院勅旨田・後三条院勅旨田を丹羽郡大領･良峰季高が寄進したと、良峰氏の系図にある。古代の丹羽郡は、丹羽郡司の系譜をもつ良峰氏によって政治動向に留意を払いながらも、支配をされていた時代であったようである。

中世（鎌倉時代）

源頼朝によって関東に鎌倉幕府という京都から自立した政権が樹立される。これに対応して良峰氏は、一族の原高春が上総広常の縁で頼朝に参じた。また、平氏との関係が深い立木田高光も、治承・寿永の乱終了後も丹羽郡司の地位を保持し続けていた。しかし継続することができず、良峰一族の原高直が 1204(元久元) 年に伊勢で起きた平氏の反乱に関係して所領没収され、ついで 1216(建保 4) 年に立木田高光が丹羽郡司を退任後、その職は子孫へと伝承しなかった。そして、稲木庄も良峰氏の手を離れ、美濃の土岐光行の一族がはいることになった。

1221(承久 3) 年の承久の乱では、鎌倉幕府の主力 1 万騎は摩免戸に布陣し、局所では山田重忠らの京方武士の活躍はあるが、圧倒的な力の差を見せつけ、後鳥羽上皇らの京都強硬派を退け京都を鎌倉幕府がおさえ込んだ。承久の乱の主要戦場ともなった尾張北部は直接の戦争被害も大きく、建久 2 年以降のある時期に稲木庄の長講堂領への課役が免除されるなど、承久の乱での大きな戦争被害を想像されよう。また、『沙石集』巻八に「承久」とは合戦の意味と誤解していた僧の笑い話が紹介されている。戦争被害が尾張の住民の記憶にも深く残ったものと想像される。

承久の乱後の鎌倉幕府は、西日本地方全体に新補地頭の設置という形で社会の激震をもたらした。守護小野氏・尾張源氏が京方についた尾張でも同様で、彼らの所領は没収され、小山氏・小笠原氏などの東国武士が尾張に進出してきた。これに対し在来の武士たちは、御家人となっても地頭に任命されることはなく、幕府の保護は間接的なものであった。だから葉栗郡尾塞を苗字の地とする尾塞氏のように、在来武士は、北条氏の得宗被官（御内人）となって、承久の乱の失地を回復しようとしたものと推測される。このなかで、荘園公領制を支えるものとして名田があった。13 世紀末段階での国衙領は千世氏名以下の名を基本的な構成単位としていた。名田畠の所在表示をする存在として、千世氏名の中に中島郡高田村・丹羽郡吾漫村と並んで、丹羽郡高木村がみえる。[1]

中世（室町時代）

得宗専制が頂点に達し不満分子が増える中で、後醍醐天皇は、その不満分子を統合し外様御家人を鎌倉幕府から取り崩して、鎌倉幕府滅亡に成功した。建武親政が破綻することで、南北朝の動乱が日本全土に拡散した。

尾張にとっての南北朝の動乱は、京都と関東に道筋にあたることによる戦争被害ばかりではなく、観応の擾乱によるものが大きい。尾張・美濃をめぐって、尊氏方・直義方・南朝方が抗争を続けたからである。1350(観応元・正平 5) 年に尊氏方の土岐一族と直義方が尾張黒田・美濃青野原で交戦、直義死後に東濃の土岐一族（蜂屋・原）・

1　醍醐寺文書　弘安五年の坪付注文より

吉良満貞・石塔頼房は南朝方につき、熱田社の熱田昌能と結んで、土岐氏被官と尾張大山寺・熱田で戦った。この戦況を有利に進めるために幕府は 1352 年に尾張・美濃・近江に半済令を発令した。この半済令によって尾張・美濃守護の土岐頼康は、尾張北中部を勢力下においていく。一方、南朝方の勢力は減退していった。しかし、この南朝の記憶は尾張各地に残っており、曼陀羅寺（江南市）が後醍醐天皇の勅願寺として創建されたという寺伝も、この南朝の記憶から作られたものと思われる。この南北朝時代に、荘園公領制を支えた名田に変化が見られるようになった。13 世紀末では名田畠の所在表示をする存在にすぎなかった「村」が、14 世紀後半には、保・名と並ぶ存在として年貢収納体系の中に位置づけられるようになった[2]。このなかで、国衙一円地の系譜を引く千世氏庄の千世氏名は、丹羽郡吾漫村が直納単位となった。ここに地縁的関係の「村」の成長を確認できよう。なお、丹羽郡高木村は直納単位とはなっていない。

1400 年頃に斯波義重が尾張守護を兼任し、尾張守護は斯波氏の子孫へ継承されるようになる。1391 年土岐康行の乱で尾張守護を失っていた土岐氏ではあるが、稲木庄 17 郷のうち 16 郷が斯波氏だけでなく土岐氏にも支配を受けるなど、尾張北部には土岐氏の勢力が残存していた。これに対して、1428(正長元) 年「尾張国松竹」が幕府により守護斯波義淳に給付されるなど、尾張北部に斯波氏の楔をうつことで守護の勢力拡大につとめた。

在京する守護の勢力拡大は、在国代官ともいえる守護代の勢力拡大に等しい。尾張守護代は、越前から移住した織田氏である。守護代織田氏の初代の織田常松が丹羽郡陽明門院勅旨田代官職を年貢 30 貫文で、春部郡六師庄代官職を年貢百貫文で請け負うなど、尾張北部の荘園群を支配下におき、1439(永享 11) 年に守護使が丹羽郡井上庄の大円寺領に派遣して、「徳銭」徴収のために百姓家の「財物に随ひ馬牛鍋釜に至るまで」責め取った。「徳銭」とは富裕者に対する臨時税で守護権限によるものであった。これに対して百姓土民は、強訴・逃散といった抗議行動をおこなった。六師庄では 1431（永享 3）・1439 年に、井上庄では 1439 年に代官更迭を要求する逃散が行われた。(『建内記』)また、二宮大県社領の庄民も 1453 (享徳 2) 年に逃散している。(『経覚私要抄』)

尾張に勢力を伸ばす織田氏であるが、織田一族で内紛が生じた。前守護代織田郷広が将軍足利義政を頼って復職を図ろうとしたのである。さらに守護斯波義健の死によって、斯波氏の内紛、そして応仁・文明の乱の一因ともなる。尾張でも戦乱が飛び火した。1478(文明 10) 年、斯波義良（義敏の子）派守護代・織田敏定と斯波義廉派・織田敏広の対立は、幕府の敏定支援決定にもかかわらず、美濃守護代斎藤妙椿が婿の敏広を援助したため、激しい戦いを招いた。結局、翌 1479 年和睦が成立し、敏定が清須城を本拠として尾張二郡、敏広が岩倉城を本拠として葉栗・丹羽・春部・山田郡を支配することになった。尾張北部は岩倉の織田伊勢守家によって支配されることになり、岩倉と清須の対立は続くことになる。

戦国時代に入り、清須の織田大和守家の三家老の一人だった織田信秀、そしてその子信長の台頭によって、尾張は統一される。1558(永禄元) 年浮野の戦いで岩倉方をやぶり、翌 1559 年に岩倉城は落城する。美濃攻略を視野においた信長は、1563(永禄 6) 年に小牧城を築城し、美濃斎藤龍興側に味方する犬山城・於久地（小口）城を 1564 年に落城させた。これ以降、織田信長は天下布武の道を突き進むことになる。

近世

織田信長が本能寺の変で倒れ、羽柴（豊臣）秀吉が天下統一の路線を継承する。しかし、その前にたちはだかったのが、徳川家康と織田信雄である。両者は、織田信雄の所領である尾張・伊勢を戦場とし、尾張北部は小牧・長久手の戦いの主要戦場となった。1584(天正 12) 年 3 月に美濃・池田恒興が草井村（現在の江南市）の村民の誘

2　醍醐寺文書　文和二年八月二三日付尾張国諸郷保以下年貢并断足用途注文他

導で鵜沼から侵入し犬山城を奪い、羽黒の戦いで羽柴方の森長可を徳川方の奥平信昌がやぶるなどの局地的な動きはあっても、全体的には現在の犬山市から一宮市東部にかけては羽柴方の勢力下に入った。羽柴秀吉が犬山にはいると、小牧城への向城を建設されている。（なお、このときに青塚茶臼山古墳が陣地のひとつとなっている）そして軍勢の乱妨を恐れて、禁制を曼陀羅寺・尾州おくち（小口）が与えられている。

豊臣秀吉の死後、再び天下は流動化した。そして 1600(慶長 4) 年関が原の戦いを迎える。岐阜藩主織田秀信が西軍についたことによって、犬山城主石川光吉も西軍についた。しかし、援軍の美濃衆・加藤貞泰は東軍に内報していた。犬山城が東軍に内通していたことから、岐阜城落城後には石川光吉以外は東軍への参加が認められている。

関が原の戦いで功績をあげた福島正則は尾張から広島へ転封となり、家康四男・松平忠吉が尾張に入った。忠吉死後、1607(慶長 12) 年家康九男・徳川義直が甲斐甲府 24 万石から転封してきた。尾張藩の成立である。義直入部後の 1608 年に、伊奈忠次・彦坂光正・中野重吉を総奉行とする一円検地が実施され、近世農村支配がはじまる。この検地は、主席奉行の伊奈忠次の官名から「備前検」といわれる。

さて犬山扇状地を含めた尾張は、木曽川などの水害に苦しんだ土地である。小牧・長久手の戦いの直後に、1586(天正 14) 年の洪水で田畑が荒廃して以降、織田信雄・豊臣秀吉によって堤防が建設された。とくに豊臣秀吉による太閤普請によって、伊木山南岸、大曲付近の危険箇所などの大修復工事が行われ、山名村から草井にかけての太閤堤が完成した。また、徳川義直入部後に、家康の命で伊那備前守忠次の指揮で、犬山から弥富まで続く延長約 40 キロメートルにおよぶ御囲堤が完成した。この結果、木曽川の支流は水源を失い平地の排水河川となり、灌漑用水を確保するために杁が設けられ宮田用水となった。

もうひとつ扶桑町をふくめた尾張北部での大事件ともいえるのが、キリシタン禁制である。1612 年禁教令以降も、もともと尾張藩はキリシタン禁制には消極的であったようで、尾張・美濃では隠れキリシタンとして残っていた。この中で丹羽郡高木村へのキリシタン布教は寛永年間に入ってから行われた。

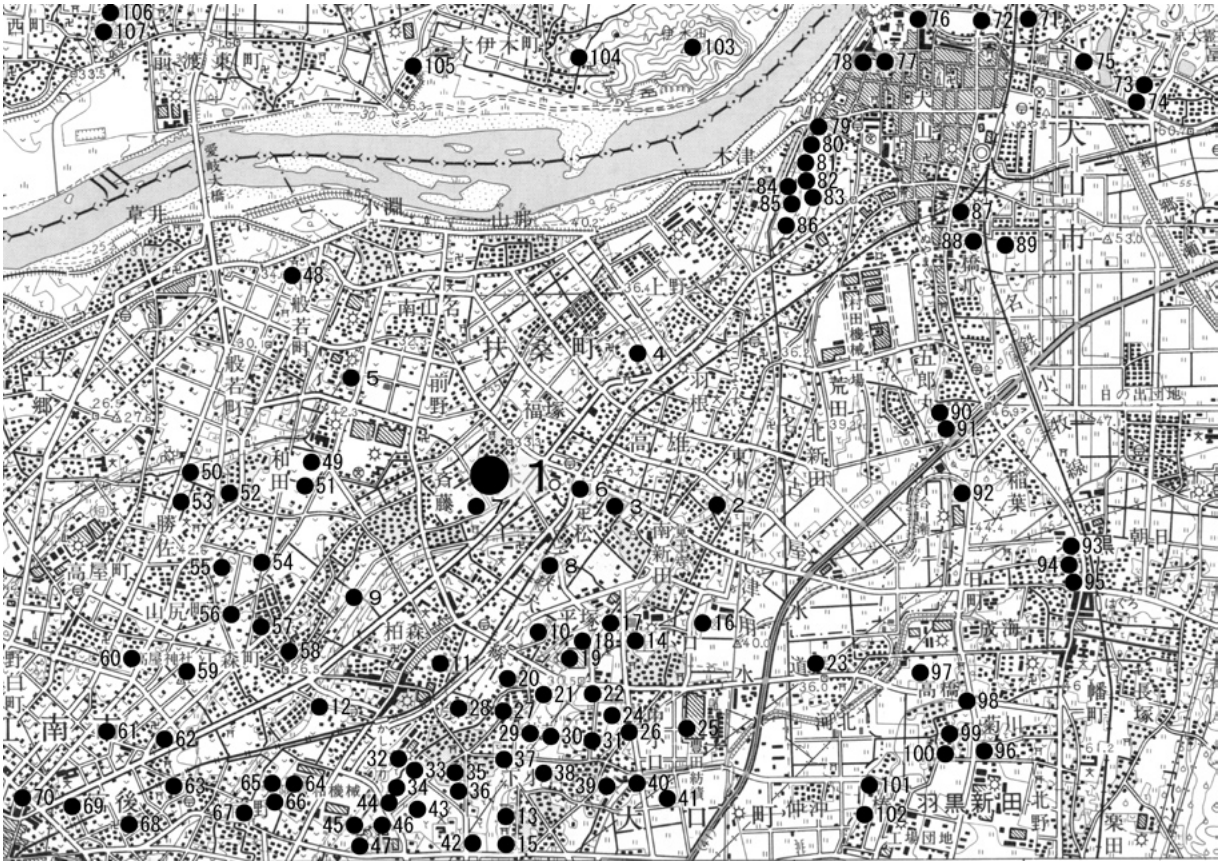
さて、1661(寛文元) 年に美濃国可児郡塩村・帷子村に知行所をもつ旗本林権左衛門からの隠れキリシタン捕縛の依頼がきっかけとなり、尾張藩でも厳しい弾圧が始まる。キリシタン奉行が設置、幕府の指示でキリシタン禁制の高札を立て、五人組による相互監視の徹底を指示、キリシタンの転宗の監視を強化、馬廻組に属する藩士まで導入して領内のキリシタンへの監視摘発を行うまでにいたった。

この結果、多くの隠れキリシタンが摘発された。1664(寛文 4) 年 12 月に名古屋千本松原で男女 200 人余のキリシタンが斬罪、葉栗郡北方付近で検挙されたものは美濃笠松大臼塚で斬罪された。丹羽郡高木村でも、1661(寛文元) 年 4 月 5 日に犬山の足軽に捕縛されたのをきっかけに 1665 年正月までに 30 世帯 82 人が捕縛された。

その後棄教して村へ帰ることを許された者もいたが、半数は処刑され、村にいびつな影を落とす。キリシタン遺跡として現在の扶桑町高木では、恵心庵があり、その中に舟形地蔵尊が祀ってある。これがキリシタン処刑者の墳墓と伝えられ、その地下から白骨がみうけられるという。この他にも扶桑町内には、キリシタン処刑地と伝えられる地点やキリシタンに関係する伝承をもつ寺院がみられる。

《参考文献》

『愛知県史資料編 1 考古 1 旧石器・縄文』（2002）
『愛知県史資料編 2 考古 2 弥生』（2003）
『扶桑町史』（1976）



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	高木遺跡		37	寺前南遺跡	弥生	73	右近塚古墳	古墳
2	長泉塚古墳	古墳	38	北屋敷遺跡	古墳	74	左近塚古墳	古墳
3	船塚古墳	古墳	39	小口城古墳	古墳	75	甲塚古墳	古墳
4	伊勢帰遺跡	古墳	40	六部遺跡	弥生	76	丸ノ内遺跡	弥生～江戸
5	樫の木塚	古墳	41	向江遺跡	弥生	77	材木町遺跡	旧石器
6	畑尻古墳	古墳	42	若ヶ橋遺跡	中世	78	県神社古墳	古墳
7	高木古墳	古墳	43	中畑遺跡	弥生～古墳	79	井堀遺跡	弥生
8	竹薮遺跡	弥生	44	下島東遺跡	弥生～古墳	80	坂下第１号墳	古墳
9	斉藤遺跡	弥生	45	下島前遺跡	弥生～古墳	81	坂下遺跡	弥生
10	花立遺跡	弥生	46	乗船遺跡	弥生～古墳	82	上野遺跡	弥生
11	元亀塚	古墳	47	西流遺跡	中世	83	岩神古墳	古墳
12	柏森遺跡	弥生	48	郷前遺跡	鎌倉	84	上野流遺跡	弥生
13	白山古墳群	古墳	49	山名坂遺跡	古墳後期	85	流古墓	中世
14	善光寺塚古墳	古墳	50	川ノ上遺跡	鎌倉	86	上野古墳群（第１～11号墳）	古墳
15	仁所野遺跡	弥生～古墳	51	黒土遺跡	古墳後期	87	国正遺跡	古墳～室町
16	起シ遺跡	弥生	52	本郷遺跡	弥生	88	四郎丸遺跡	弥生～古墳
17	墓ノ腰遺跡	弥生	53	八王子遺跡	鎌倉	89	四郎丸東遺跡	弥生
18	西山神Ａ遺跡	縄文	54	二夕子薬師古墳	古墳	90	神明社古墳群	古墳
19	西山神Ｂ遺跡	旧石器	55	高海戸遺跡（勝佐遺跡）	縄文晩期・古墳	91	神明社遺跡	弥生～古墳
20	水瀬遺跡	弥生～古墳	56	石塚古墳	古墳後期	92	北巾遺跡	弥生～古墳
21	垣田遺跡	縄文	57	宮東遺跡	古墳	93	磨墨塚	中世
22	地蔵堂遺跡	縄文	58	河原山遺跡	縄文中後期	94	羽黒城跡	中世
23	上向江古墳	古墳	59	角畑遺跡（両高屋東遺跡）	縄文・弥生・中世	95	羽黒城古墳	古墳
24	下山伏遺跡	古墳	60	大門遺跡	鎌倉	96	高橋第１号墳（羽黒古墳）	古墳
25	万願寺遺跡	古墳	61	大日遺跡（両高屋遺跡）	弥生	97	高橋第２号墳	古墳
26	馬場遺跡	弥生～古墳	62	八幡裏遺跡	古墳・奈良・室町・江戸	98	高橋第３号墳	古墳
27	寺浦遺跡（浅畑遺跡）	古墳	63	八幡前遺跡	室町	99	高橋第４号墳	古墳
28	西浦遺跡	弥生	64	寺ノ西遺跡	古墳	100	高橋第５号墳	古墳
29	寺前遺跡	弥生～古墳	65	前野大塚古墳	古墳	101	北屋敷遺跡	旧石器
30	宮西古窯	奈良	66	宮浦遺跡	古墳	102	椿遺跡	弥生
31	宮之前遺跡	弥生～古墳	67	前野小塚古墳	古墳	103	伊木山址	中世
32	清水遺跡	弥生～古墳	68	砂場裏遺跡	平安	104	大伊木古墳群	古墳
33	日高遺跡	弥生～古墳	69	南大塚古墳	古墳	105	大牧古墳群	古墳
34	日高南遺跡	弥生～古墳	70	小金堂遺跡	平安・鎌倉	106	芦原遺跡	弥生
35	神明下遺跡	弥生～古墳	71	妙感寺古墳	古墳	107	矢熊山北古墳群	古墳
36	権現西遺跡	弥生	72	内田第５・６号墳	古墳			

図４　周辺遺跡分布図（1/50,000）

3　扶桑町の近世村落

－『寛文村々覚書』と『尾張徇行記』から－

尾張は、支配した尾張藩の好学的嗜好から当時の様子を伝える文献史料が豊富である。とくに近世村落を伝えるものとして、17 世紀後半の石高・田畑面積・村落の人口などを伝える『寛文村々覚書』と 18 世紀末の様子を伝える『尾張徇行記』がある。扶桑町を含む丹羽郡はともに史料が伝存し、この時代の近世村落の様子を今に伝える。この２つの史料を利用して、現在の丹羽郡扶桑町が近世においてどのような村落景観を有していたかを検討したい。

なお、現在の丹羽郡扶桑町には、犬山羽根村・下野村・下野原新田村・北山名村・岩手村・南山名村・高木村・斎藤村・柏森村の９村が近世において存在した。このうち 1878(明治 11) 年に、犬山羽根村・下野村・下野原新田村の３村は合併して高雄村に、北山名村・岩手村は合併して山那村となり、近隣町村との移動はあるが、これら６つの地名が現在の大字名として残っている。

まず、丹羽郡全体を概観すると、丹羽郡全体の土地条件は、尾張国の他郡と比較して、葉栗郡についで低いものであり、主要穀物の米が多く産出できない状況であった。そして、水田はほとんどなく、畑作中心であったから、換金作物の栽培と農家の副業が早くから普及していたと思われる[3]。

さて、『寛文村々覚書』から、17 世紀後半（近世前期）の丹羽郡扶桑町の様子を検討する。これが【表１】である。

土地条件では、丹羽郡全体の石高平均は 641 石である[4]のに対し、現扶桑町となる９村は平均で 370 石と 60％弱であり、石高規模が小さい村落が多い。また、本田畑に限定すれば、田畑面積は丹羽郡全体をやや下回るだけであるのに、水田率は 6.2％と圧倒的に畑地が多い現状を示している。結果､耕地１反あたり石高(いわゆる石盛)は、丹羽郡全体の３分の２程度となっている。

一方で住民の状況は、戸数・人口ともに丹羽郡全体をやや下回るにすぎず、一人当たりの石高は 1.1 石となっている。生活をしていくために必要な一人当たりの石高は 1.5 石という研究[5]があるので、扶桑町の村々は 17 世紀後半から苦しい生活を強いられていたことがわかる。

さらに、『尾張徇行記』も利用し、18 世紀末までの扶桑町の新田開発進行状況及び人口と戸数の変動を検討する。これが【表２】である。

石高増加率は、新田畑としての増加分であり、17 世紀後半の本田畑の 12% の増加にあたる。ここから１世紀以上にわたる新田開発の営々とした努力を読み取れる。しかし、この増加分は下野原新田村を新田村として出すなどの下野村を中心とするものであり、扶桑町の北部に偏るものであった。

次に、人口増加率を見ると、扶桑町全体で 1.73 倍となった。また、戸数増加率は 2.34 倍と人口以上に増加している。これは全国の変動とほぼ一致する数値である。これは、全国的な傾向で、近世初頭まで本百姓に付随していた名子・被官といった隷属民や農家の嫡男以外の男子が独立し、１戸の家を構えたことによるものである。だから、現扶桑町となる９村でも､1 戸あたりの人員も 6.1 人から 4.5 人に減少している。

しかし【表２】の一人あたり石高を見ると、ともに、田畑の生産力が人口の増加に追いつかなくなっていることを示しており、とくに 18 世紀末になると、すべての村で生活をしていくために必要な石高 1.5 石を下回っている。

ところで、【表２】の中で注目されるのが、人口増加率・戸数増加率ともに高木村が異常に高いことである。他の村の増加は、新田開発や都市化による人口・戸数増であろう。しかし、高木村における異常な増加率は、他の理由を考えたい。

3　梶川勇作『近世尾張の歴史地理』p114
4　梶川勇作『尾張藩領の村落と給人』p19
5　鬼頭　宏『文明としての江戸システム』p69
6　鬼頭　宏『文明としての江戸システム』p77

それは、17 世紀後半に尾張藩によるキリシタン弾圧で壊滅的な人口減少があったことである。寛文元年から 5 年間で 30 世帯 82 人が捕縛され、多くの人が帰らなかった。これは、『寛文村々覚書』の数値からも、同じような近隣村落とは違った数値となって現れたのだろう。しかし『尾張徇行記』の数値では、あまり違いは見られない。よって、この減少は 1 世紀以上たってようやく回復することができたと思われる。

さて、18 世紀末の様子を伝える『尾張徇行記』によると、年貢の納入は「麦成」とあり岩手村以外では麦での納入が認められており（一部も含む）、麦以外の作物として綿・茶・桑・荏・雑穀・大豆が栽培されているとしている。また「茶桑ノ間ニハ小麦又ハ荏ヲ多クツクレリ」（柏森村）、「畠毛ハカリニシテ砂地故ニ茶桑ヲ多ク栽、其間ニ雑穀荏大豆ナトラツクレリ」（南山名村）とあり、畑地に複数の作物が栽培されている様子を伝えている。また、柏森村とその記載のない犬山羽根村・下野原新田村を除いて、どの村も戸口の多さに比べ田畑の不足を記載しており、他村への小作や副業としての養蚕・工商・薪売・織物（菅大臣縞）が記載されている。【表３】

これらから、水田がきわめて少ない扶桑町では、畑地では年貢用として麦が栽培されており、

表１　『寛文村々覚書』からみた扶桑町の村々

村名	本田畑			耕地 1 反あたり石高	寛文村々覚書の記録（17 世紀後半）				一人あたり石高	村名
	①概高 (石)	田畑合計 (町)	水田率（%）	17 世紀後半	②戸数 (軒)	①／② (石)	③人数 (人)	③／② (人)	17 世紀後半	
犬山羽根	76.217	18.22	0	4.30	7	10.89	44	6.29	1.73	犬山羽根
下野	1145.362	122.75	31.55	9.00	135	8.48	953	7.06	1.20	下野
下野原新田										下野原新田
北山名	175.615	19.53	0	8.99	113	1.55	629	5.57	0.28	北山名
岩手	3.842	0.75	0	5.12	5	0.77	30	6.00	0.13	岩手
南山名	623.816	70.75	0.07	8.82	85	7.34	468	5.51	1.33	南山名
高木	144.38	17.13	0	8.19	16	9.02	84	5.25	1.72	高木
斎藤	239.145	33.11	0.76	7.19	54	4.43	313	5.80	0.76	斎藤
柏森	551.953	86.08	17.18	6.41	50	11.04	356	7.12	1.55	柏森
扶桑町平均	370	46.0	6.2	8.0	58	6.69	360	6.1	1.1	扶桑町平均
丹羽郡全体	641	52.7	36.7	12.1	63	10.2	368	5.9	1.7	丹羽郡全体

注：「耕地１反あたり石高」「一人あたり石高」の単位は斗。「耕地１反あたり石高」は新田畑を含む

表２　『寛文村々覚書』と『尾張徇行記』の扶桑町におけるデータの比較

村名	人口増加率	戸数増加率	石高増加率	一人あたり耕作面積（町）		一戸あたり耕作面積 (町)		一人あたり石高（石）		村名
				17 世紀後半	18 世紀末	17 世紀後半	18 世紀末	17 世紀後半	18 世紀末	
犬山羽根	1.77	2.29	1.09	0.41	0.25	2.60	1.21	1.73	1.07	犬山羽根
下野	1.30	1.98	1.10	0.13	0.11	0.91	0.53	1.20	1.02	下野
下野原新田					0.10		0.46		0.73	下野原新田
北山名	1.37	1.88	1.00	0.03	0.02	0.17	0.09	0.28	0.20	北山名
岩手	0.90	1.20	1.00	0.03	0.03	0.15	0.13	0.13	0.14	岩手
南山名	1.39	1.94	1.00	0.23	0.16	1.24	0.64	1.97	1.42	南山名
高木	3.25	3.63	1.10	0.20	0.07	1.07	0.33	1.72	0.58	高木
斎藤	1.90	2.50	1.01	0.11	0.06	0.61	0.25	0.76	0.41	斎藤
柏森	1.98	3.30	1.00	0.24	0.12	1.72	0.52	1.55	0.78	柏森
扶桑町全体	1.73	2.34	1.04	0.17	0.10	1.06	0.46	1.17	0.71	扶桑町全体

注：「人口増加率」「戸数増加率」「石高増加率」の 18 世紀末のデータは下野原新田村のデータも含んでいる。

18 世紀末には慢性的な田畑不足から、桑・茶といった換金作物の栽培、茶・桑の間に麦などを栽培、農閑期の副業が積極的な行われていたことがうかがえる。すなわち、低い生産力をいろいろな作物を栽培することでカバーしていたものと思われる。また『尾張徇行記』にはないが、食い扶持を減らすために、嫡男以外の男子や女子が名古屋などで武家奉公・商家への年季奉公や他地域への行商なども行われたことと思われる。

近代に入って殖産興業が推進され、1872(明治5) 年愛知県は五穀不出来の土地には必ず桑・茶を植えるように諭告した。生糸の輸出の増大とともに桑は順調に栽培量を増やした。一方で、製茶価額の下落により茶が、輸入品の圧迫により綿も減少していった。この結果、この地域では、養蚕業への傾斜が起こり、桑の栽培が急速に増加していった。この景観が昭和 50 年代まで残っていたのである。その意味では、現在の多様な作物を栽培している扶桑町の畑地は、作物こそ変われ、近世への景観に逆戻りをしているのかもしれない。

表３　『尾張徇行記』における扶桑町の近世農耕の様子

村名	田畑状況
犬山羽根	
下野	高ハ準ニシテハ戸口多ク佃力足レリ
下野原新田	
北山名	戸口多ク耕田不足
岩手	戸口ニ準シテハ耕田少キ
南山名	高ハ準ニシテハ戸口多ク佃力足レリ
高木	高ハ準ニシテハ戸口多ク
斎藤	耕田タラサル
柏森	高アタリ町反モ格別ニ延、戸口モ多クシテ糧戸ヨクトトノヘリ

《参考文献》
『扶桑町史』（1976）
梶川勇作『近世尾張の歴史地理』
（1997、企画集団 NAF）
梶川勇作『尾張藩領の村落と給人』
（2002、企画集団 NAF）
鬼頭宏『日本の歴史第 19 巻文明としての江戸システム』
（2002、講談社）

4　調査の経緯と経過

今回の発掘調査は、県道草井羽黒線道路改築事業に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行われたものである。

まず、依頼を受けた愛知県教育委員会が平成14年度に遺跡の有無確認および範囲確認調査を行った。その結果、当該範囲が発掘調査の必要があると判断された。これを受けて、愛知県教育委員会から委託を受けた(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時）が平成15(2003)年から調査を実施した。調査面積は3550㎡である。

発掘調査は、平成15(2003)年度から平成16(2004)年度にかけて行われた。調査面積は、平成15年度2,700㎡、平成16年度850㎡であり、合計3,550㎡の調査を実施した。調査担当者は、平成15年度は藤岡幹根（主査：現小牧市立一色小学校教諭）・武部真木（調査研究員）、平成16年度は石黒立人（主査）・加藤博紀（調査研究員）である。なお、平成15年度の調査分は、下の図のように4つの調査区に分割して実施した。なお、その経過については下の表および次ページの調査日誌抄録として記す。

また、整理作業および執筆は平成17(2005)年度に行っている。

表4　調査工程表

年度	平成15年度					平成16年度	
月	7	8	9	10	11	4	5
03 A区・C区							
03 B区・D区							
04区							

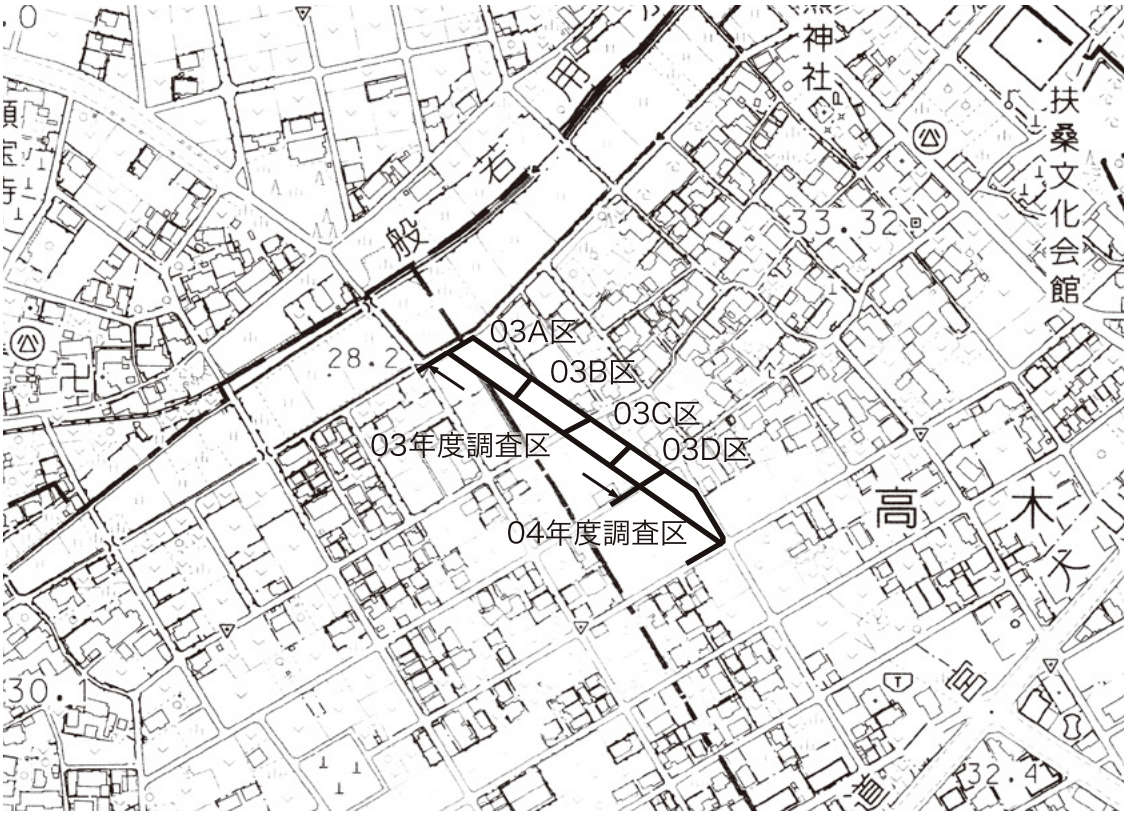


図5　調査区位置図（1／5,000）

平成 15(2003) 年度調査日誌抄録

7 月 1 日　フェンス設置などの環境整備開始
7 日　03A 区バックホウによる表土剥ぎ開始
14 日　03A 区作業員作業開始
15 日　03C 区バックホウによる表土剥ぎ開始
24 日　03C 区作業員作業開始
25 日　03A 区検出Ⅰ開始
31 日　03A 区遺構掘削開始
8 月 6 日　03A 区平面実測
7 日　03A 区包含層掘削および検出Ⅱ
20 日　03A 区土坑群完掘状況撮影
25 日　03A 区遺構掘削終了
03C 区遺構検出
27 日　03C 区遺構掘削開始
9 月 10 日　03A 区・C 区ラジコンヘリにて空測
11 日　03A 区・C 区スカイマスターによる写真撮影
16 日　03A 区・C 区補足調査
18 日　03A 区・C 区重機による埋戻開始
22 日　03D 区バックホウによる表土剥ぎ開始
26 日　03D 区作業員作業開始
03B 区表土剥ぎ開始
30 日　03D 区包含層掘削および遺構検出開始
10 月 2 日　03D 区遺構掘削
03B 区作業員作業開始
5 日　扶桑町歴史講座
03D 区遺構掘削
8 日　03B 区検出開始
03B 区遺構掘削
10 日　03B 区・D 区ラジコンヘリによる空
31 日　測およびスカイマスターによる写真撮影
11 月 4 日　03B 区・D 区補足調査
10 日　補足調査完了
11 日　03B 区・D 区重機による埋戻

平成 16(2004) 年度調査日誌抄録

4 月 12 日　バックホウによる表土剥ぎ開始
15 日　作業員作業開始および検出開始
22 日　検出状況写真撮影
23 日　遺構掘削開始
5 月 13 日　スカイマスターによる写真撮影
17 日　レーザー測量による遺構測量
19 日　補足調査
23 日　重機による埋戻

第２章　遺構と遺物

１　概要

今回の調査範囲は、扇状地微高地地形を横断する形となっており、検出面は標高 29m ～ 32.5m、約 3.5m の比高差がある（図 9 ～ 11）。北西の 03A 区が最も低く、旧河道へ続く微高地の縁が確認されている。遺構は主に微高地上で確認されたが、上部は耕作（畑）等により著しく削平されていた。地表から表土、耕作土（オリーブ褐色砂質シルト）、基盤層（褐色シルト質砂、円礫、砂を含む）の堆積を確認し、遺構検出は基本的に耕作土の下（方）で行った。耕作地の地境には円礫を積み上げて土留めとした改変が繰返し行われており、土中に含まれる中世～近世の陶磁器は小片に破砕され、耕作土が大きく移動していると考えられる。

遺構・遺物ともに全体に希薄であったものの、03A・B・C 区では古墳時代の溝、03D 区・04 区では古墳時代末～古代の溝、03D 区で中世の溝（道）、集石遺構などが確認されている。

以下、時代ごとに遺構･遺物について記述する。

２　古墳時代

03A・B 区 SX01

調査区 A・B 境付近の南壁で確認した。長さ約 15m、溝の幅は検出部分で約 2.4m、深さは約 50cm を測る。埋土は暗褐色シルトである。溝は直線ではなく、緩やかな弧を描き調査区外へのびる。遺物は検出されなかったが、埋土の状況は SX02（03B 区）と同様であり、古墳時代と推定される。

03A 区 SD17

上記 SX01 を切り重複する幅 85cm 深さ 60cm の溝で耕作痕の残存部分と思われる。須恵器杯身（24,25）が出土した。H-61 号窯式段階と思われる。SX01 から混入した可能性が高い。

03B 区 SX02

B 区の東南隅で確認した。検出範囲で長さ約 12m、幅 2.2m、深さ 55cm で、溝底面のレベルは平均 31.5m である。溝は直線ではなく緩やかにカーブしている。埋土は暗褐色シルト、最下層は粘土質が強い。遺物は主に溝下層から出土した。須恵器壺（９,10）、杯蓋（11）、杯身（12）があり、その他タタキを施した須恵器甕片が多い。９は胴部をタタキで調整し、上半部をナデ調整する。10 は胴部に３条の沈線を巡らし、その間を斜方向の連続刺突で充填する。杯は H-61 号窯式に比定でき、以上は５世紀後半～６世紀の時期に属すると思われる。。

03B 区 SD23

幅約 40m、深さ 20 ｍの溝で、新しい時代の耕作痕と思われるが、一部が SX02 と重複する。出土した杯身（13）は SX02 とほぼ同時期であり、耕起により混入したものと思われる。

03C 区 SZ01（SD03・27・23）図版４・図６

SD03 は幅 1.9m、深さ約 40cm。北東～南西にのびて南西端は L 字状に屈曲する。SD23 は幅 1.1m、深さ約 30cm。SD03 の北東端が調査区壁に区切られる辺りから南東に向かって直線的にのびて終息する。SD03,23 でコの字状の区画を形成する。これらの埋土はにぶい黄褐色シルトに基盤の砂が混じるもので、SD23 の南東端付近から南西方向にのびる SD27 は、幅約３m、深さ 60cm、下層に小礫を含むものの埋土はよく似ている。以上の溝底のレベルは 31.6 ～ 31.8m

である。これらは内側に一辺約 10m の方形区画を形成し、古墳周溝となる可能性がある。SD27 と SD03 との接合部は調査区外となり判然としない。ただし SD23 は終息しており連続しない。SD27 に重複する SD25 は幅の一定しない溝状の落ち込みで、埋土は暗褐色シルトの斑土で小礫を含む。

なお主体部、盛土等はいずれも確認されなかった。また、溝から遺物は出土していない。

03D 区 SD06

方位は N-53°-E、SD04 の下に重複する幅 3.6m、深さ 70cm の溝である。埋土には厚い粗粒砂層を含んでおり、強い水流があった旧流路の可能性がある。遺物は須恵器高杯（26）、杯身（27）、タタキ目のある甕片などが出土した。7 世紀前半頃の時期か。

04 区 SD01

幅約 14m、深さ 2.0m の大溝を長さ 13m の範囲で確認した。堆積層下部に砂層がみられるが、底面は土壌化しており、当初は乾燥していたとみられる。溝の方位は N-10°-W であり、微高地を斜めに横断する方向である。溝の規模、埋積の状況から「切り通し」的な通路であった可能性が考えられる。遺物は、上層に中世遺物が混じり、中層から下層にかけて散漫に古代の遺物含まれる。最下層で須恵器壺（15,18,19）が出土した。他に平瓶（17）は肩部の径 16.5cm。18 は口径 11.9cm、丸みを持った俵形で断面円形の胴部をもつ壺であり、表面はタタキ調整される。7 世紀後半を中心とした時期に比定される。土師器鍋（16）はいわゆる清郷型鍋で、鍋 C4 類 [*1] に分類される。10 世紀半ば～後半の時期に比定される。

その他に土師器台付甕（1，2，4）のうち、1，2 は 03B 区で狭い範囲に隣接して検出された。1 は口径 14.4cm、残存高 31cm、台部端を欠損している。口縁を上にして潰れた状態で検出された。宇田型甕 I 類 [*2] に分類される。2 は台部のみで、底部との接合部中央に粘土を充填している。底部を上にした状態で検出された。4 はいわゆる S 字甕で、B 類の古段階 [*3] に分類される。廻間 II 式期。広口壺（6，7）、高坏（3，5）、直口壺（8）などがある。6 は胴部上位に鋭利な工具で連弧文が施される。1，3 はほぼ同時期で、5 世紀前半。2 は 5 世紀後半。4 ～ 8 は 3 ～ 4 世紀に比定される。

須恵器甕（14）は微高地から下がった地点 03A 区 SK36 で検出された。頸部に波状文が 2 段に施され、その間に 2 条の沈線がめぐる。体部外面はタタキ調整される。他に壺（20）、鉢（21）、壺（23）などがある。

3　古代

03D 区 SD04

方位は N-52°-E、幅約 7m、深さ 65cm の D 区を横切る溝である。埋土は暗褐～黒色の砂質シルトで、小円礫を含む。廃絶後には中世の遺物と小礫を含む SX01、SK17 が重複する。溝の最下層から須恵器有台杯（32）、横瓶（33）、灰釉陶器椀（29 ～ 31）、灰釉陶器長頸瓶（35）、土師器清郷型鍋（34）が出土した。30 は O-53 窯式期、29,31 は高台接地面が摩滅している。H-72 号窯式期に比定される。34 は鍋 C6 類 [*1]。34 がやや新しい様相をもつ他は概ね 10 世紀半ば～後半の時期に比定される。

その他に 03B 区から須恵器無台杯（41）、03C 区で軟質の焼成の須恵器高坏（36,37）、04 区包含層からは須恵器杯蓋（42）、灰釉陶器椀（38,39）、清郷型鍋（40）、灰釉壺の底部（43）などがある。38 は体部上半に灰釉を漬け掛けし、体部外面にケズリの稜が認められる。39 は H-72 窯式期に比定される。40 は清郷型鍋で鍋 C4 類 [*1] に分類される。41 はやや軟質の焼成で底部をヘラ切り調整する。美濃須衛窯産か。以上は概ね 10 世紀半ばから後半を中心とした時期の資料である。

4　鎌倉・室町時代

03D 区 SX01　図 8

付近の土壌に含まれている円礫の集石遺構である。範囲は、4.1 × 3.0m の方形に近いものと、幅 50 ～ 80cm の平行にて帯状のびる部分からなり、ちょうど SD04 の溝の幅内に大部分が収まる。円礫は径 40cm のものから、小礫まであり、部分的には配置されたように並ぶ個所も認められる。下部には集石に伴う遺構は存在せず、直下は SD04 上層の堆積層であった。ただし、集石地点には小片ながらも中世施釉陶器が混じり、これは調査範囲内では比較的多い。山茶碗・小皿（50 ～ 53）、天目茶碗（54）、灰釉縁釉小皿（55）、灰釉四耳壺（56 ～ 58）、灰釉瓶子 II 類 [*4]（59）、灰釉水注 I 類（49）、灰釉折縁深皿（62）、灰釉直縁大皿（63）、灰釉柄付片口（65）、土師器内湾彎型羽釜（61）、錆釉擂鉢（64）などがある。54 の胎土は、緻密で体部の立ち上がりは強い。鉄釉はうすく、高台周辺にうすく錆釉が施される。59 四耳壺高台はやや高い貼付高台。四耳壺類を除き、古瀬戸後期を中心とした 15 世紀代の遺物がやや多く含まれる。61 は羽の下方胴部にかけてススが付着する。64 擂鉢は大窯 1 段階 [*5]、16 世紀初頭。

03D 区 SK17

長さ 5.0m、幅 1.8m、深さ 22m の楕円形の土坑であり、埋土は礫を含まない明褐色の砂質シルトである。山茶碗（44 ～ 48）がまとまって出土した。今回の調査範囲内では残存率の高い資料が多い。底部が比較的厚い 44,45 は内面口縁付近と高台接地面が摩滅している。46,47 は内外面にススが付着している。45 は窯洞 1 号窯段階、44,46 ～ 48 は白土原 1 号窯段階に比定される。13 世紀前半を中心とした時期。

03C 区 SD24・SD20

幅 0.8 ～ 1.2m、深さ 15 ～ 20cm、約 3m の間隔をおいてほぼ平行する溝であり、調査区北東壁から緩やかな弧を描いて南東へのびる。SD25 に重複し中世以降と思われる。

03D 区 SD05

幅 0.9 ～ 1.4m、深さ約 15cm の溝。上記の平行する溝と規模等類似している。平安時代の溝 SD04 埋没後に掘削されている。中世以降と思われる。

その他、集石遺構のみられた 03D 区では、中世段階の遺物がやや多く分布する。60 は片口鉢底部で、内面は著しく摩滅している。62 は土師質羽付釜。山茶碗（67 ～ 69）は生田 2 号窯段階。15 世紀半ば～後半。灰釉卸目付大皿（66）、灰釉ハサミ皿（70）、灰釉蓋（72）、71 は菊印花文のある灰釉皿、天目茶碗（73）、74 は灰釉折縁中皿。

04 区では山茶碗・小皿（78 ～ 80）、鉄釉小鉢か（81）、灰釉卸目付大皿（82）、古瀬戸後期～大窯段階を中心とした天目茶碗（83 ～ 85）、灰釉縁釉小皿（87）、折縁皿（88）、削り込み高台の丸皿（89）、非ロクロ成形の土師質小皿（90）がある。78 は大洞東 1 号窯段階、79 は脇之島 1 号窯段階で 15 世紀前半。他に山茶碗 75,77 は内面および高台接地面が摩滅している。窯洞 1 号窯段階。76 は明和 1 号窯段階。

5　その他

畑地境の石垣（石積）裏込や、廃棄土坑などに近世（近代）の遺物が混じる。91 は体部が直線的に開く陶器碗（小杉碗の形態）。92 は付高台の陶器丸碗。93 は鉄釉秉燭。使用痕あり。94 は赤褐色の陶器平碗または蓋。95 は長石釉練鉢。96 は焙烙 I 類 [*6]、19 世紀後半。97 は染付皿。98,99 は土瓶蓋。100 は陶器鉢。全面に灰釉系の

釉が施される。101 は土瓶底部で、使用によるススが付着している。103 は擂鉢片を用いた加工円盤。

時期不明の土坑がある。長方形土坑群と、03A 区微高地より下がった地点に集中する不定形の土坑群がある。後者には植栽痕や廃棄土坑が含まれる。

土坑（イモアナ）

形状および配置に規格性が認められる無遺物の長方形土坑群であり、埋土はいずれも斑土状を呈する。土坑群は、掘り込まれる層位が若干異なっており、掘削時期にはある程度の時間幅が想定される。付論において詳述されている現代の耕作痕と類似しており、同様の性格が想定される。規模は幅 60 ～ 80cm、長さは 0.8 ～ 1.9cm があり、同軸方向に並び、同軸方向あるいは直交する向きで重複する場合も多い。

溝（耕作痕）

深さ 20 ～ 70cm の平行する溝が、まとまった単位で掘削されたもので、直交する場合もみられる。現代の耕作痕であり、地域の住民によれば、現在はゴボウを栽培しているという。溝の幅は 40cm 前後のものとそれより狭いものがみられるが、前者は人力によるもの、後者は専用の機械（トレンチャー）による掘削痕と予想される。

【註・参考文献】

*1…永井宏幸 1996「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム
*2…赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」愛知県埋蔵文化財センター研究紀要 2
*3…赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集
*4…瀬戸市埋蔵文化財センター 1996『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～資料集』
*5…藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 10
*6…金子健一 1996「近世陶器煮炊具の分類」『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム

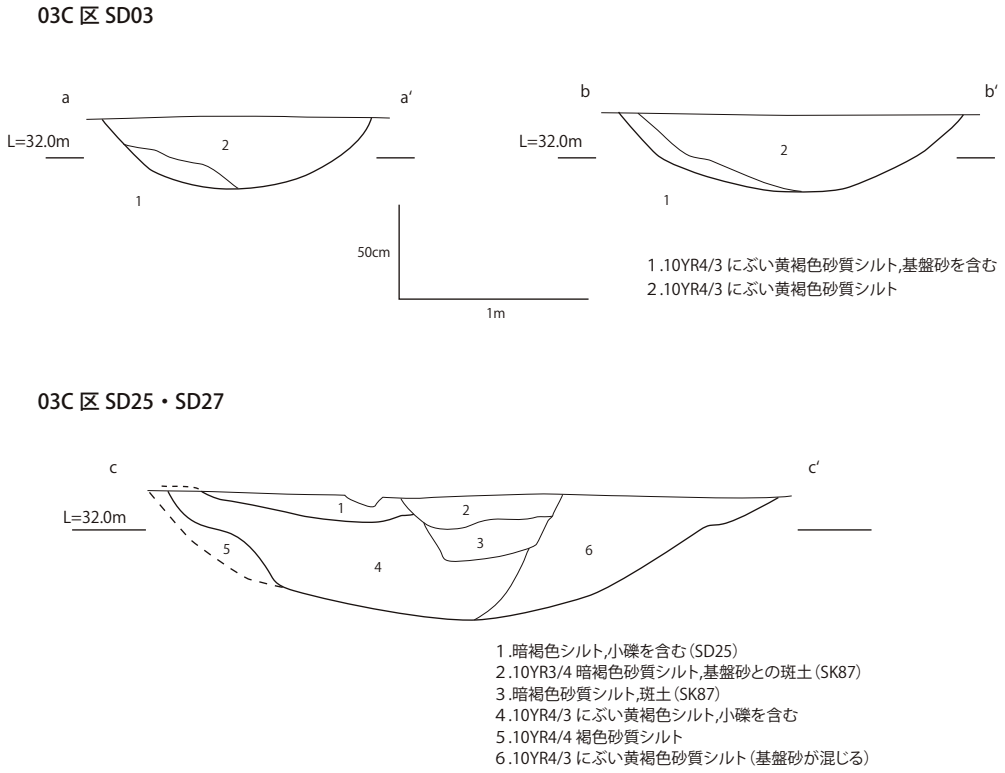
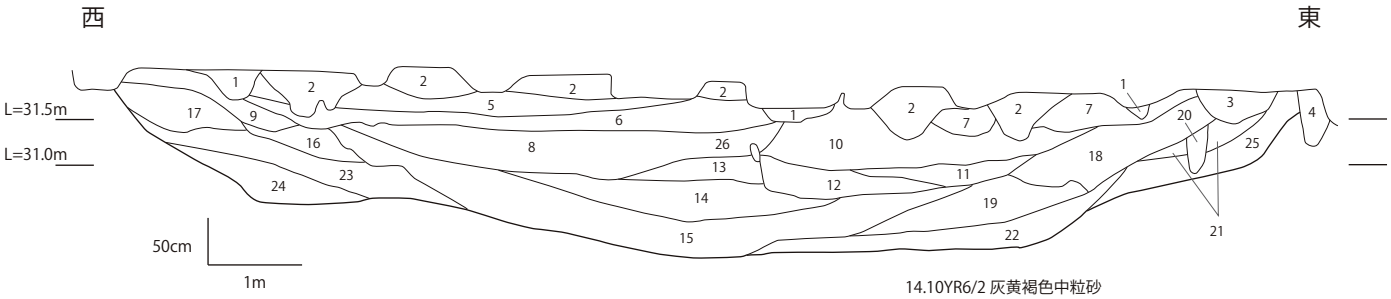


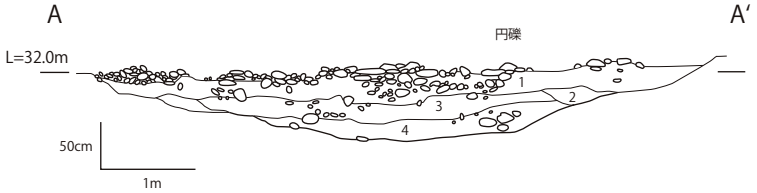
図 6　SZ01 溝断面　S ＝ 1/40

04 区 SD01

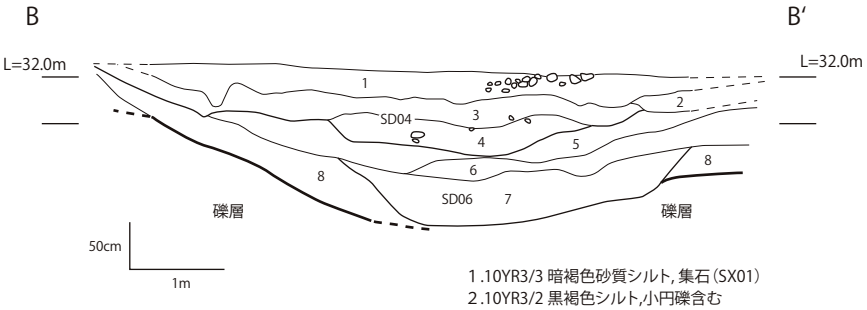


1.2.5Y5/3 黄褐色細粒砂（斑土含む）=北東壁セクション第４層
2.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）=北東壁セクション第17層
3.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）
4.10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）
5.10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）
6.7.5YR5/4 にぶい褐色細粒砂（斑土含む）
7.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）
8.10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂
9.10YR5/2 灰黄褐色細粒砂（斑土含む）
10.10YR6/4 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）
11.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）
12.7.5YR5/3 にぶい褐色極細粒砂
13.10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂
14.10YR6/2 灰黄褐色中粒砂
15.10YR5/2 灰黄褐色中粒砂
16.7.5YR5/3 にぶい褐色細粒砂（斑土含む）
17.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）
18.!0YR5/2 灰黄褐色細粒砂（斑土含む）
19.10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂
20.10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）
21.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂（斑土含む）,17層と対応か
22.10YR6/4 にぶい黄褐色極細粒砂
23.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂
24.10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂
25.10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂,24層と対応か
26.10YR4/2 灰黄褐色細粒砂
27.10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂（ベース）

03D 区 SD04（集石 SX01 重複部分）



03D 区 SD04・SD06



1.10YR3/3 暗褐色砂質シルト, 集石（SX01）
2.10YR3/2 黒褐色シルト,小円礫含む
3.10YR2/2 黒褐色シルト,礫をほとんど含まない
4.10YR2/1 黒色シルト,基盤砂をブロック状に含む,礫含む
5.10YR3/3 暗褐色シルト質砂,黒色シルトをわずかに含む
6.10YR3/3 暗褐色シルト質砂
7.2.5Y4/2 暗灰黄色中～粗粒砂,（暗灰色シルトとの互層）
8.10YR4/4 褐色細粒砂（基盤層）

図７　溝（SD）断面　S＝1/80

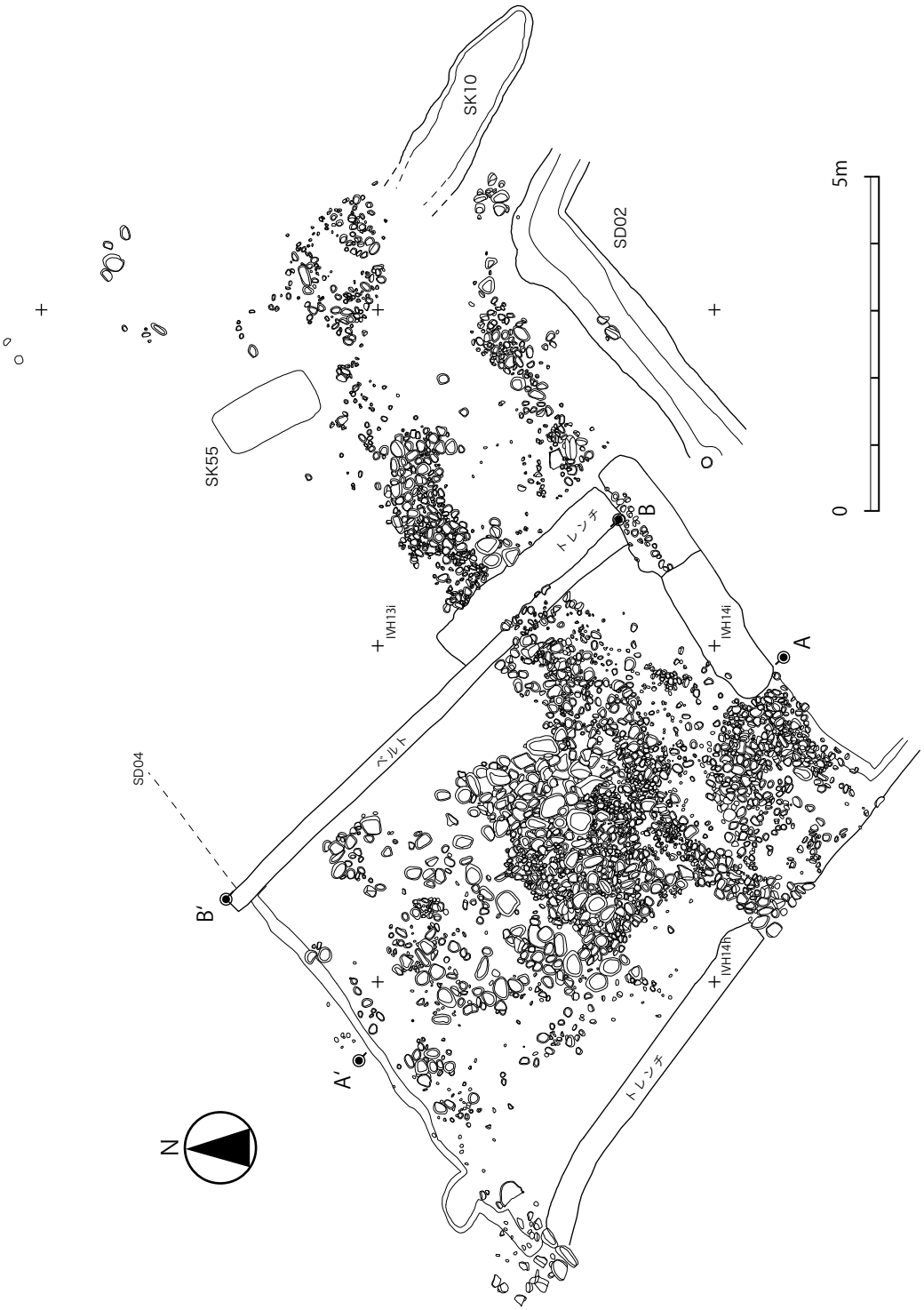
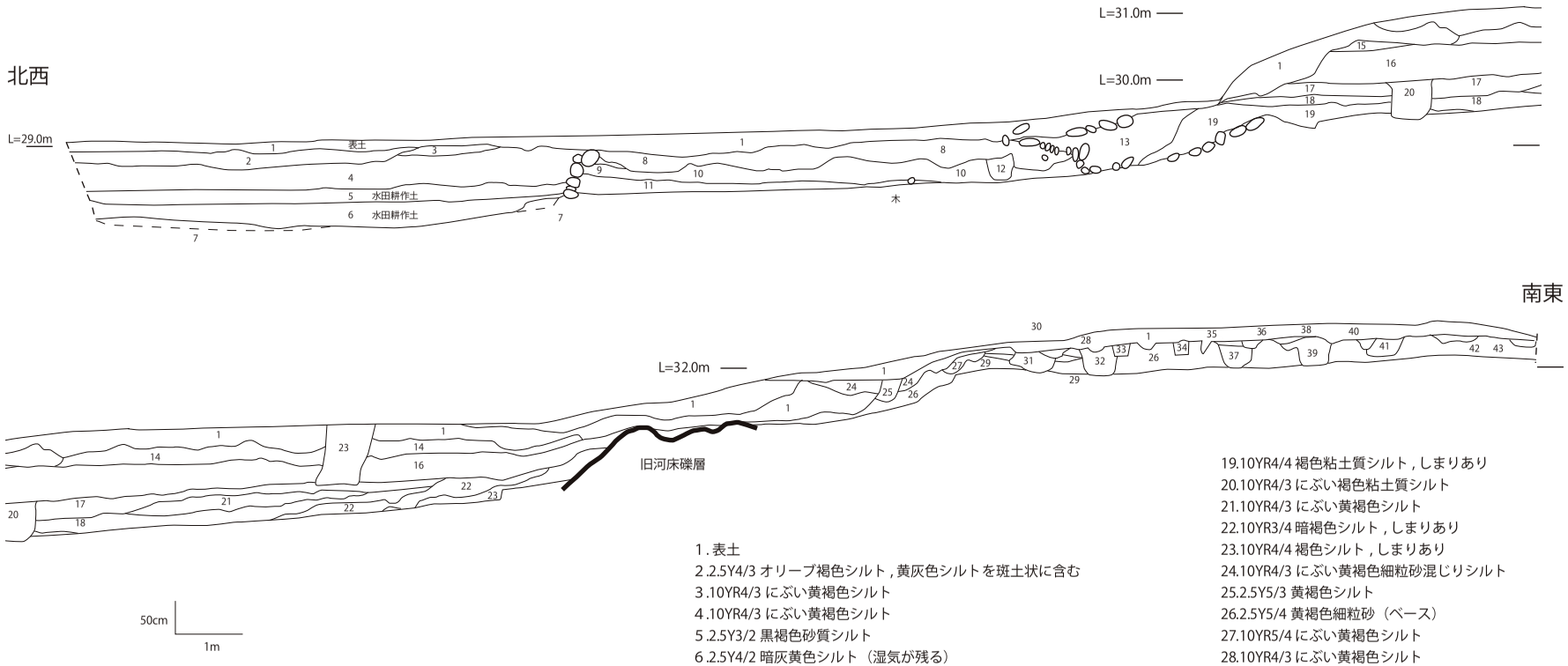


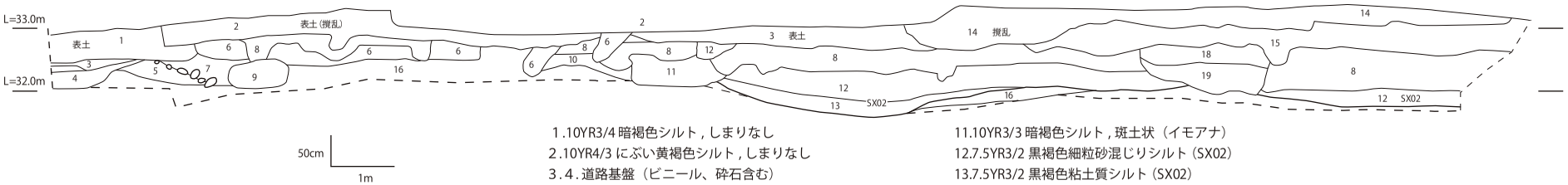
図 8　集石（SX01）平面図　S＝1/100



1. 表土
2 .2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト , 黄灰色シルトを斑土状に含む
3 .10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
4 .10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
5 .2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト
6 .2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（湿気が残る）
7 .2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土質シルト , 鉄分集積
8 .10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト , 黄灰色シルトを斑土状に含む , 炭混じる
10.10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト
11.10YR3/3 暗褐色粘土質シルト , 砂質シルト混じる , 炭化物含む
12.2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト , 黄灰色シルトを斑土状に含む
13.2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト , 樹木根残る
14.2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト
15.2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
16.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト , しまりあり , 細粒砂含む
17.2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂混じりシルト
18.10YR3/4 暗褐色粘土質シルト , 斑土状
19.10YR4/4 褐色粘土質シルト , しまりあり
20.10YR4/3 にぶい褐色粘土質シルト
21.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
22.10YR3/4 暗褐色シルト , しまりあり
23.10YR4/4 褐色シルト , しまりあり
24.10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト
25.2.5Y5/3 黄褐色シルト
26.2.5Y5/4 黄褐色細粒砂（ベース）
27.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
28.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
29.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質砂
30.2.5Y5/3 黄褐色シルト
31.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
32.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
33.2.5Y5/3 黄褐色シルト
34.2.5Y5/3 黄褐色シルト
35.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
36.2.5Y5/3 黄褐色シルト
37.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
38.10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
39.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト

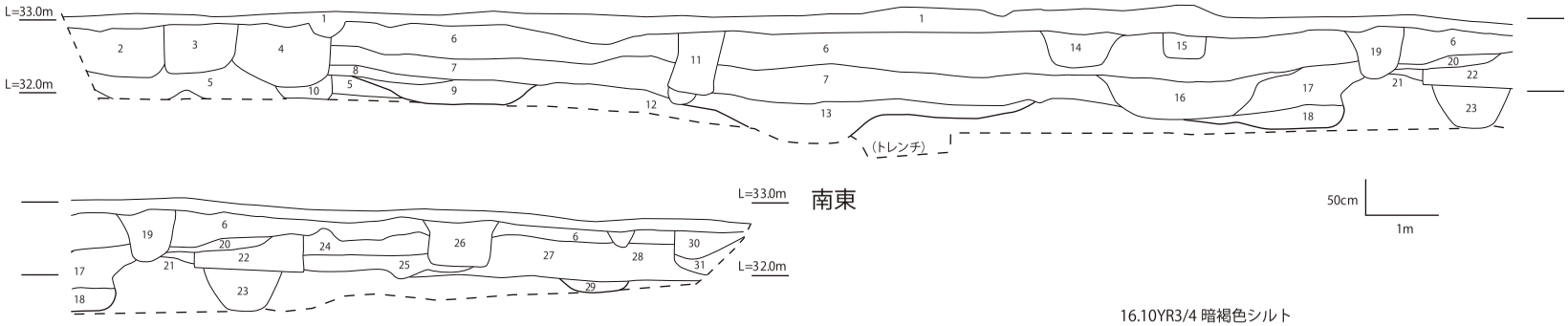
図 9　03A 区北東壁　S ＝ 1/100

03B 区　北西　　南東



1.10YR3/4 暗褐色シルト , しまりなし
2.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト , しまりなし
3.4.道路基盤（ビニール、砕石含む）
5.10YR3/4 暗褐色シルト , しまりあり
6.10YR3/3 暗褐色シルト , しまりなし
7.10YR4/4 褐色シルト , 斑土状 , しまりなし
8.2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂混じりシルト
9.10YR3/4 暗褐色シルト , 斑土状 , しまりなし（イモアナ）
10.10YR3/2 黒褐色シルト , 斑土状（ベース含む）
11.10YR3/3 暗褐色シルト , 斑土状（イモアナ）
12.7.5YR3/2 黒褐色細粒砂混じりシルト（SX02）
13.7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト（SX02）
14.10YR3/4 暗褐色シルト , しまりなし
15.10YR4/4 褐色シルト , しまりなし
16.10YR3/3 暗褐色シルト , 斑土状（ベース含む）
17.10YR4/6 褐色シルト質砂
18.10YR4/4 褐色シルト ,no.8 が混じる斑土状
19.no.18 よりシルトが強い , 炭化物含む

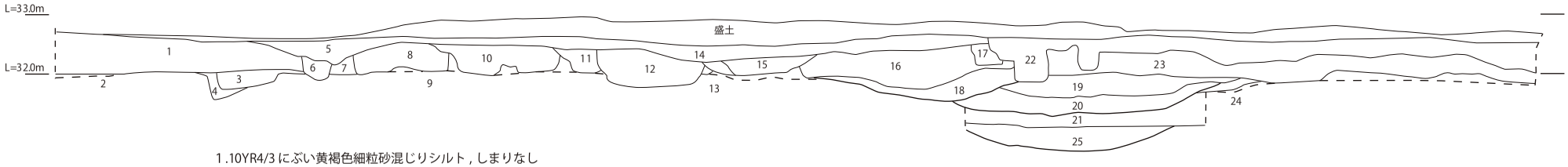
03C 区　北西　　南東



1.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、斑土状 , 炭化物 , 植物の根が多く入る　（表土）
2.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状
3.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状
4.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状
5.10YR3/3 暗褐色砂質シルト , 斑土状（基盤層砂を含む）
6.10YR3/4 暗褐色細粒砂を多く含むシルト , 斑土状（基盤層砂を含む）
7.10YR3/4 暗褐色砂質シルト , 斑土状（基盤層砂を含む）
8.
9.
10.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状
11.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状
12.10YR3/3 暗褐色シルト , 基盤層の砂をブロック状に含む
13.
14.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状 , 炭化物を含む
15.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状
16.10YR3/4 暗褐色シルト
17. 基盤層の砂に 10YR3/3 暗褐色シルトがブロック状に混じる
18.
19.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状
20.10YR3/4 暗褐色シルト , 斑土状（基盤層砂を含む）
21.10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトに暗褐色土がブロック状に混じる
22.10YR3/3 暗褐色砂質シルト , 斑土状 , 小礫を含む
23.10YR3/3 暗褐色砂質シルトに基盤層の砂がブロック状に混じる , 拳大の礫を含む
24.10YR4/4 褐色シルト , 斑土状 . 基盤層の砂を多く含む
25.10YR2/3 黒褐色シルトに基盤層の砂がブロック状に混じる
26. ビニールなど混じる（撹乱）
27.10YR3/4 暗褐色シルト , 斑土状（基盤層砂を含む）
28.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状
29.
30.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状
31.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト , 斑土状 , 基盤層の砂を多く含む

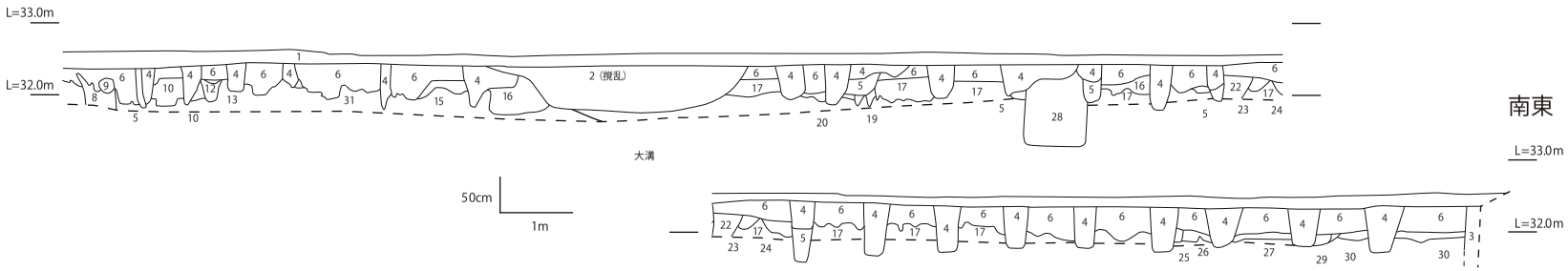
図 10　03B・C 区北東壁　S ＝ 1/100

03D 区　北西



1.10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト , しまりなし
2.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト , しまりなし
3.10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト
4.10YR4/4 褐色シルト , 基盤層の砂を含む
5.10YR4/2 灰黄褐色シルト（ビニール含む）
6.10YR3/3 暗褐色シルト
7.10YR3/4 暗褐色シルト
8.10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト
9.10YR4/6 褐色細粒砂混じりシルト（基盤層）
10.10YR3/3 暗褐色シルト
11.10YR3/4 暗褐色砂質シルト
12.10YR3/3 暗褐色シルト
13.10YR2/3 黒褐色シルト
14.10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
15.10YR3/3 暗褐色シルト , 斑土状 , 基盤層の砂を含む
16.10YR3/3 暗褐色シルト , 炭化物 , 木の根を多く含む
17.10YR3/3 暗褐色シルト , 炭化物を多く含む
18.10YR2/3 黒褐色シルトに基盤層砂がブロック状に混じる（中世陶器含）
19.7.5YR3/2 黒褐色シルト
20.7.5YR2/2 黒褐色粘土質シルト
21.10YR2/2 黒褐色砂質シルト , 基盤層の砂が混じる
22.10YR3/4 暗褐色シルト , やや粘土質
23.10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
24.10YR3/4 暗褐色粘土質シルト
25.

04 区　北西



1.表土
2.撹乱（瓦片などを含む）
3.撹乱
4.2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 , 斑土状
5.2.5Y5/4 黄褐色細粒砂
6.2.5Y5/4 黄褐色細粒砂 , 斑土状 , 耕作土
7.10YR6/4 にぶい黄橙色細粒砂 , 斑土状
8.10YR5/4 にぶい黄橙色細粒砂 , 斑土状
9.10YR6/4 にぶい黄橙色細粒砂 , 斑土状
10.2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂 , 斑土状
11.2.5Y6/3 暗灰黄色細粒砂
12.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂 , 斑土状
13.10YR5/2 灰黄褐色細粒砂
14.2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂 , 斑土状
15.10YR5/2 灰黄褐色細粒砂 , 斑土状
16.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂 , 斑土状
17.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂 , 斑土状
18.2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂 , 斑土状
19.2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂 , 斑土状
20.2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂 , 斑土状
21.2.5Y5/3 黄褐色細粒砂
22.2.5Y5/4 黄褐色細粒砂
23.10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂 , 斑土状
24.2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 , 斑土状
25.2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 , 斑土状
26.2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂 , 斑土状
27.2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂 , 斑土状
28.2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂 , 斑土
29.2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 , 斑土状
30.2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂 , 斑土状
31.2.5Y6/4 にぶい黄色細粒砂（基盤層）

図 11　03D・04 区北東壁　S＝1/100

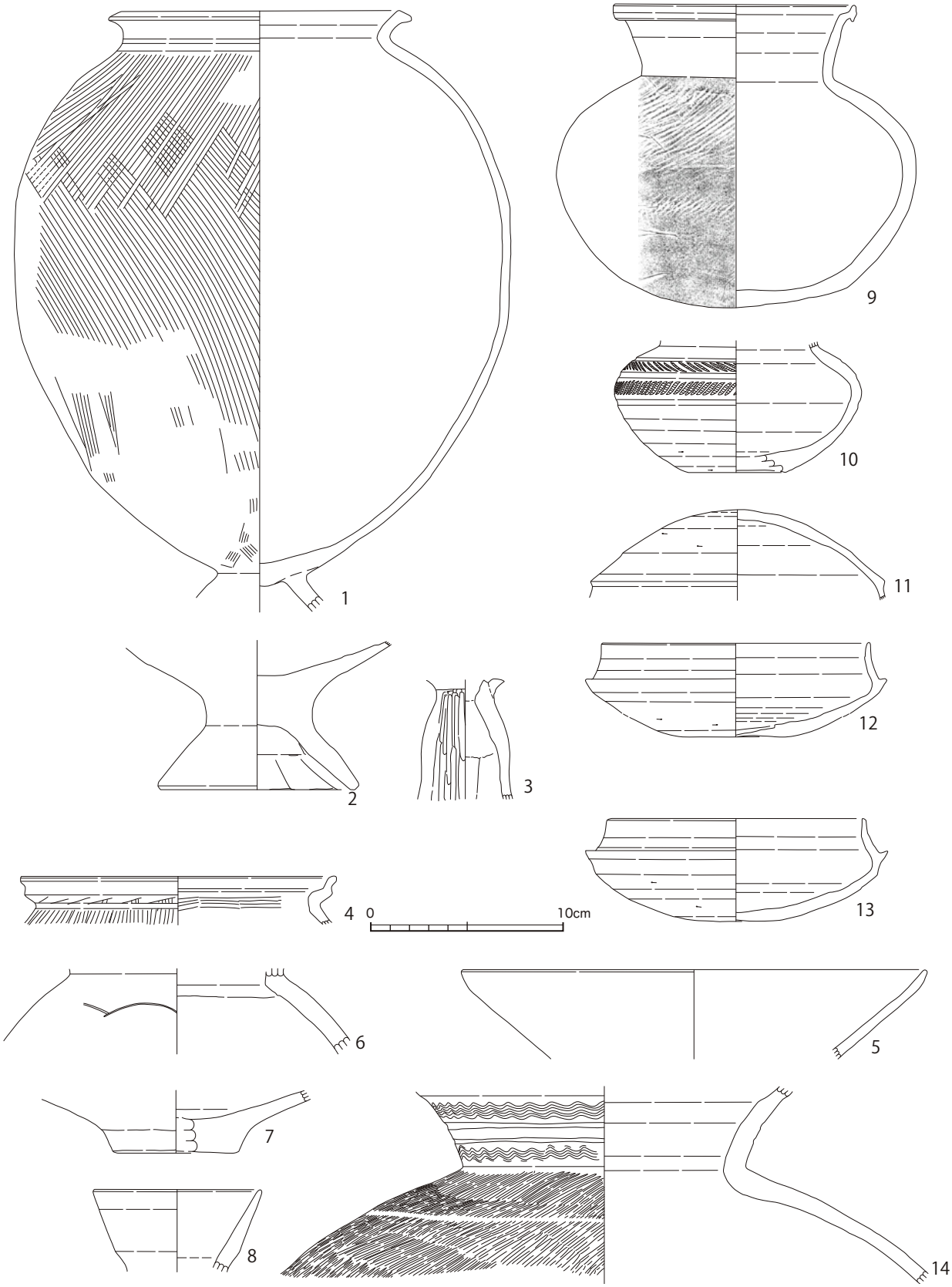


図 12　古墳時代の遺物　S ＝ 1/3

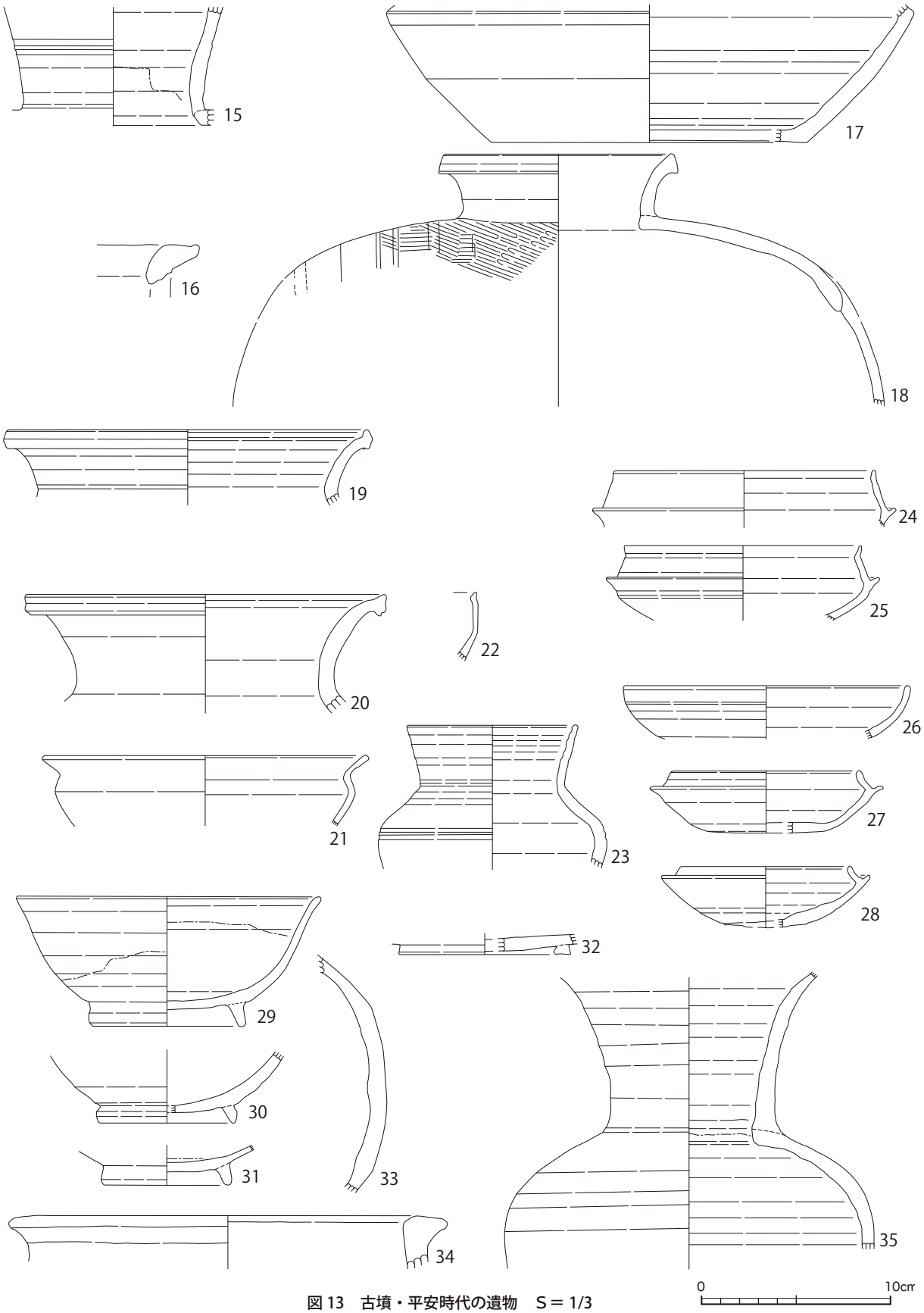


図 13　古墳・平安時代の遺物　S＝1/3

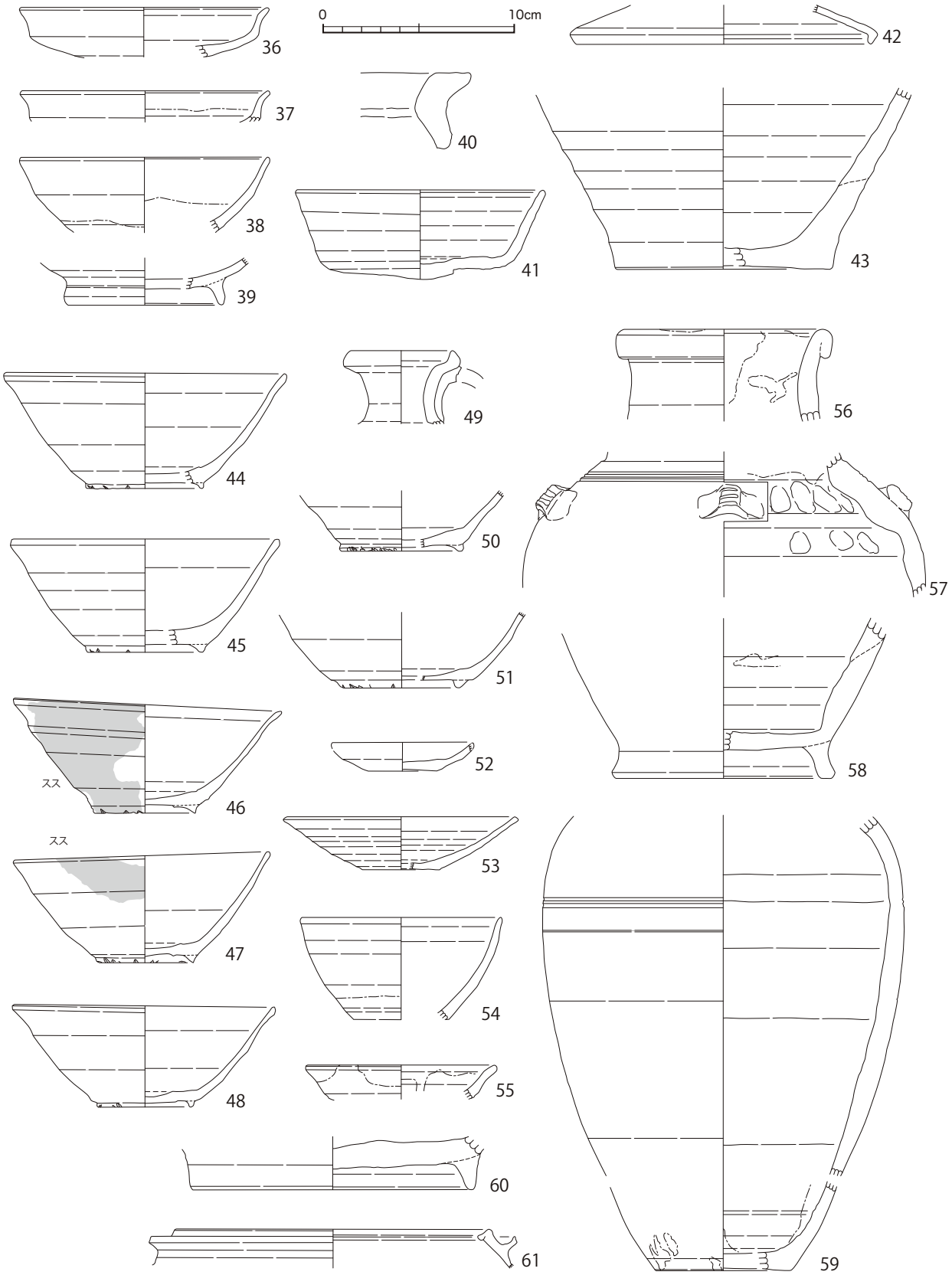
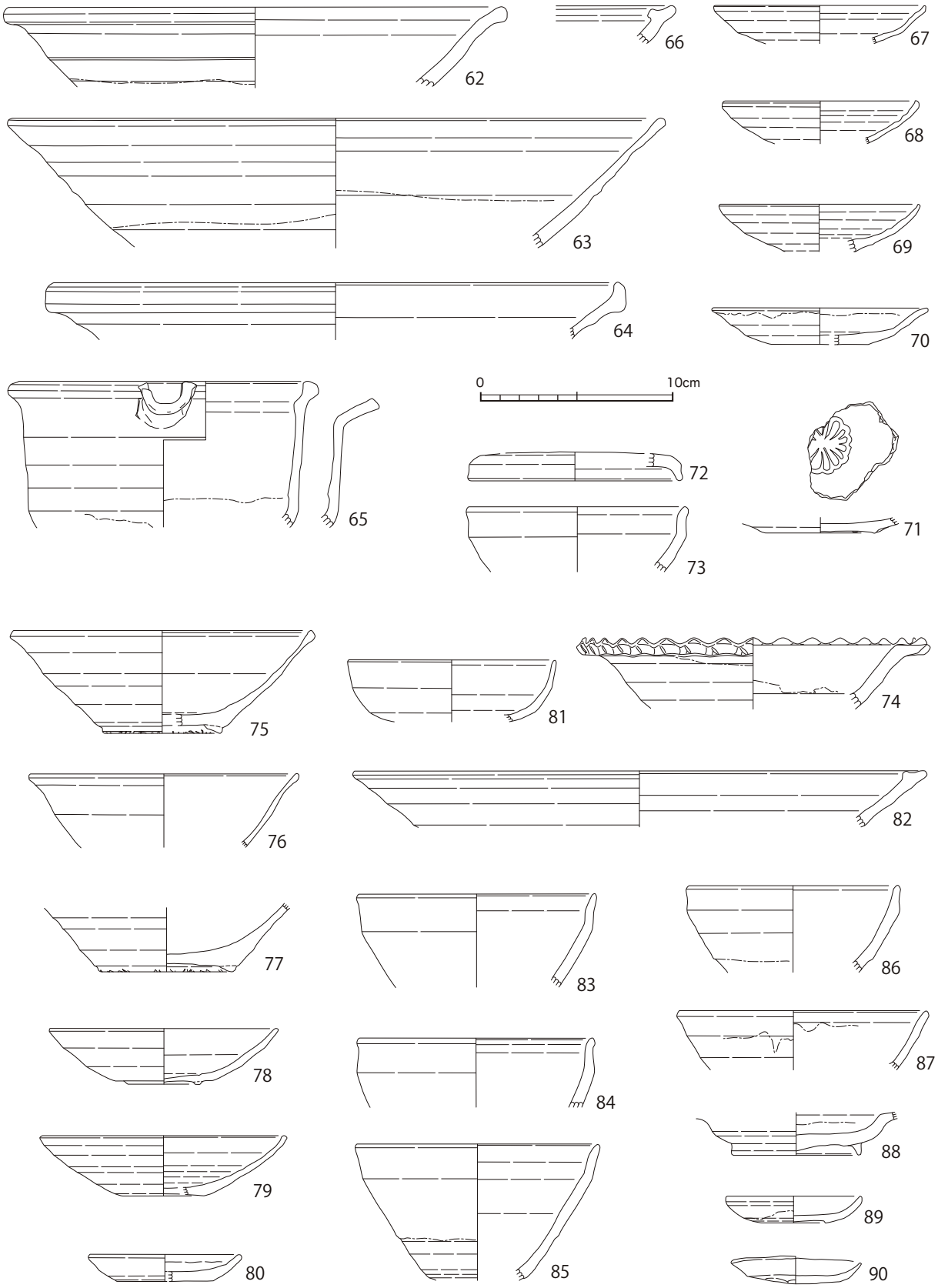


図 14　平安・鎌倉・室町時代の遺物 (1)　S ＝ 1/3



9　図 15　平安・鎌倉・室町時代の遺物 (2)　S ＝ 1/3

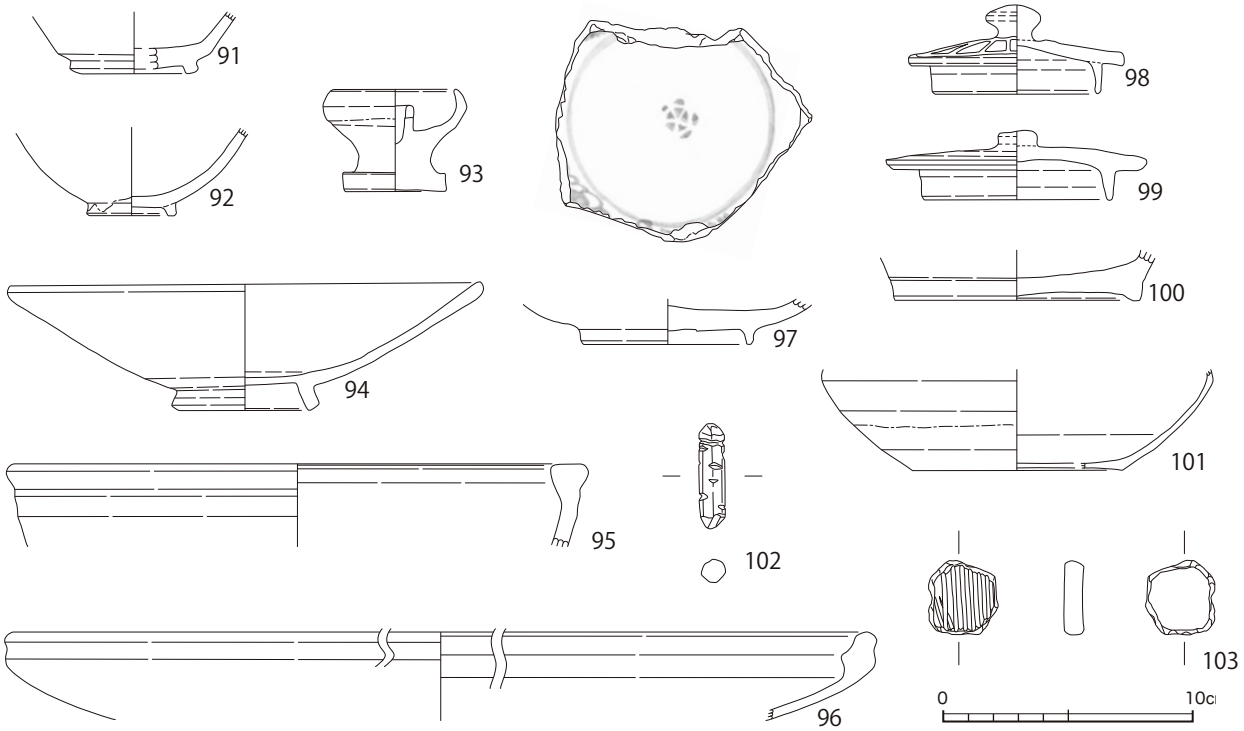


図 16　近世の遺物　S = 1/3，(102 のみ S = 1/2)

表 5　遺物一覧 (1)

E-	調査区	グリッド	遺構no.	種別・釉薬など	器種	口/12 (上部)	底/12 (下部)	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	備考
1	03B	IVG6s,4s	SX04（no.23～44,49～67）、SX02,SK41	土師器	台付甕	12		14.4	*31.0		宇田型甕I類
2	03B	IVG6s	SK41（no.11）、SK41	土師器	台付甕		12		7.5	10.0	
3	03A		表採	土師器	高坏				6.2		
4	03B	IVG4r	SK74	土師器	S字甕	2		16.2	2.4		B類,廻間II式期
5	03B	IVG4p	SK16	土師器	高坏	1		24.0	4.2		
6	03B	IVG4p	SK80	土師器	広口壺				3.8		
7	03B	IVG4g	検出II（no.68）	土師器	広口壺		6		2.8	6.0	
8	03C		表採	土師器	直口壺		2		4.2	8.6	
9	03B	IVG4s	SX02（no.47,20,21,48）	須恵器	壺	4	12	12.3	15.6	10.0	
10	03B	IVG4s	SX02（no.17,19）	須恵器	壺		2		6.7	5.0	
11	03B	IVG4s	SX02（no.18）、SX02 ベルト、SD23 トレンチ、検出II	須恵器	杯（蓋）				4.7		
12	03B	IVG4s,4t	SX03,SX02	須恵器	杯	2	4	13.7	4.9	5.4	
13	03B	IVG4s,4r	SD23 トレンチ、SX02ベルト、SX02,北壁トレンチ	須恵器	杯	2	11	12.9	5.3	2.0	
14	03B	IVG4s	SK36	須恵器	甕				*9.3		
15	04	IVH16p	検出 I（NR01上層）	須恵器	長頸壺か				6.4		
16	04	IVH16o	NR01中・下層	土師質	鍋			*24	*2.0		清郷型鍋
17	04	IVH18p,15o	検出 I	須恵器	平瓶		1		*7.2	16.5	

表 6　遺物一覧 (2)

E-	調査区	グリッド	遺構no.	種別・釉薬など	器種	口/12 (上部)	底/12 (下部)	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	備考
18	04	IVH18p	NR01中・下層、検出Ⅰ（NR01上層）	須恵器	壺	3		11.9	*13.2		
19	04	IVH17o	検出Ⅰ（NR01上層）	須恵器	壺	1		18.8	3.5		
20	03A	VIH8d	SK79 a（no.1）	須恵器	壺	3		18.8	6.2		
21	03C	IVH9e	トレンチ（no.5）	須恵器	鉢	2		16.8	3.7		
22	03C	IVH7a	SK05	須恵器	高杯か				3.6		
23	03A	IVG1m,2l	SD32（no.7）,SD13	須恵器	壺	3		8.8	7.6		
24	03A	IVG1・2l	SD17	須恵器	杯	1		13.7	3.0		
25	03A	IVG1l	SD17	須恵器	杯	1		12.4	3.9		
26	03D	IVH11i	SD06（no.53）	須恵器	高杯	3		14.8	2.8		
27	03D	IVH11i	SD06（no.52）	須恵器	杯	3	4	9.8	3.3	3.0	
28	03D	IVH11i	SD04下砂層	須恵器	杯	3	3	8.7	3.2		
29	03D	IVH12h	SD04（no.37,32,33,34,35,38,40,46）,SD04,SD04(下層)	灰釉陶器	椀	10	12	15.8	6.8	7.7	
30	03D	IVH11h	SD04	灰釉陶器	椀		2		*3.7	7.1	
31	03D	IVH12h	SX01	灰釉陶器	椀		5		2.1	6.6	
32	03D	IVH12h	SD04（no.39）	須恵器	有台杯		4		*1.1	9.1	
33	03D	IVH12h	SD04（no.42）,SX01(ベ	須恵器	横瓶				12.5		
34	03D	IVH12h	SX01(下層)ベルト北	土師質	鍋	1		21.2	3.1		清郷型鍋
35	03D	IVH11i,11h	SD04（no.24,25,26,27,43,45）	灰釉	長頸瓶				15.2		
36	03C		南壁清掃	須恵器	高杯	1		12.8	2.6		36,37同一個体か
37	03C	IVH8a	SK52	須恵器	高杯	1		13.0	1.6		36,37同一個体か
38	04	IVH15o	検出Ⅰ	灰釉陶器	椀	2		13.0	*3.9		
39	04	IVH17n	検出Ⅰ	灰釉陶器	椀		2		2.45	8.1	
40	04	IVH17q	検出Ⅰ	土師質	鍋	1			3.9		清郷型鍋
41	03B	IVG4s,4r	SD21（no.16）,SK35,検出Ⅰ（no.4）	須恵器	無台杯	6	12	12.8	4.6	8.2	美濃須衛窯産か
42	04	IVH19q	検出Ⅰ	須恵器	蓋	1		19.0	2.0		
43	03D	IVH11i	no.1	灰釉陶器	壺		3		9.0	11.0	
44	03D	IVH11i	SK17（no.20）		山茶碗	5	1	14.4	5.9	6.0	高台摩滅
45	03D	IVH11i	SK17		山茶碗	1	4	13.6	5.9	6.0	高台摩滅
46	03D	IVH11i	SK17（no.19）,SD04上層		山茶碗	10	12	13.8	5.4	5.2	スス付着
47	03D	IVH11i,12i	SK17（no.2）,SD04(上層),検出I(SX01),表土ハギ,掘下		山茶碗	2	7	13.2	5.5	4.9	スス付着
48	03D	IVH11i,10i	SK17（no.18）,SK19,SD04上層		山茶碗	9	11	13.5	5.2	5.9	
49	03D	IVH12h	SD04ベルト１層 no.50	灰釉	水注	5		5.4	*3.8		
50	03D	IVH11i	検出I(SX01 no.17)		山茶碗		3		3.1	6.3	
51	03D	IVH12h	SX01　ベルト南		山茶碗		3		3.9	6.0	
52	03D	IVH11h	検出I(SX01)		山茶碗		6		1.5	3.6	
53	03D	IVH12g	SX01 下層,SX01 ベルト南		山茶碗	2	5	11.8	2.8	4.0	
54	03D	IVH12h	SX01,SD04上層	鉄釉	天目茶碗	2		10.4	5.3		
55	03D	IVH11h	検出I(SX01)	灰釉	縁釉小皿	3		9.8	1.8		
56	03D	IVH11h	SD04上層	灰釉	四耳壺	2		10.4	*4.8		

表 7　遺物一覧 (3)

E-	調査区	グリッド	遺構no.	種別・釉薬など	器種	口/12 (上部)	底/12 (下部)	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	備考
57	03D	IVH12i, 12h	SD04 上層,検出 7	灰釉	四耳壺				7.8		
58	03D	IVH12i, 12h	SX01,SK10,SD04上層	灰釉	四耳壺		4		7.5	11.2	
59	03D	IVH11h, 12h,12g	SD04 第1層 no.49,SD04上層 SX01,SX01ベルト南	灰釉	瓶子		6			7.0	
60	03D	IVH12i	掘下（no.6）		片口鉢		2		2.3	14.6	内面摩滅
61	03D	IVH11i	SX01	土師質	羽付釜	1		16.2	1.7		スス付着
62	03D	IVH12h	SX01	灰釉	折縁深皿	1		25.4	4.2		
63	03D	IVH12g	SX01	灰釉	直縁大皿	1		33.4	6.7		
64	03D	IVH12h	SX01	錆釉	擂鉢	1		29.1	2.9		
65	03D	IVH12h	SD04ベルト第2層 SX01ベルト南	灰釉	柄付片口	2		14.8	7.5		
66	03D	IVH12g	掘下	錆釉	擂鉢	1			2.0		
67	03D		表採		山茶碗	3		10.8	2.0		
68	03D		表採		山茶碗	2		9.8	2.2		
69	03D		表採		山茶碗	3		10.2	2.5		
70	03D		表採	灰釉	緑釉小皿	3	2	11.0	1.9	5.0	
71	03D		南トレンチ（東）	灰釉	皿（菊印花）		4		0.8	5.6	
72	03D		南壁（東）清掃	灰釉	蓋	1		10.8	1.6		
73	03D	IVH12i	掘下	鉄釉	天目茶碗	2		11.2	3.4		
74	03D	IVH10f	掘下	灰釉	折縁中皿	1		17.4	3.7		
75	03B	IVG3r	検出II（no.12）		山茶碗	2	6	15.4	5.3	6.0	
76	03C	IVH8e	SK122（no.6）		山茶碗	2		13.8	3.8		
77	03B	IVG3r	検出II（no.12）		山茶碗		6		3.3	6.8	
78	04		検出 I		山茶碗	5	7	11.8	2.9	3.7	
79	04	IVH17q	検出 I		山茶碗	3	4	12.5	3.1	4.2	
80	04	IVH14n	検出 I		小皿	1	3	7.5	1.4	5.0	
81	04	IVH17p	検出 I	鉄釉	小鉢	1		10.6	*3.2		
82	04	IVH17r	検出 I	灰釉	卸目付大皿	1		*29.4	*2.9		
83	04		SX01	鉄釉	天目茶碗	2		12.2	4.8		
84	04	IVH15o	検出 I	鉄釉	天目茶碗	2		12.0	*3.6		
85	04	IVH19r	検出 I	鉄釉	天目茶碗	3		12.4	*7.1		
86	03B	IVG2m	SX01	鉄釉	天目茶碗	1		13.4	4.5		
87	04		検出 I	灰釉	緑釉小皿	1		12.8	*3.1		
88	04	IVH16o	SX02	灰釉	折縁皿		4		2.2	6.4	
89	03A		表土ハギ	灰釉	丸皿	4	6	7.8	1.4	3.3	
90	03C	IVH8d	SK76（no.4）	土師質	小皿	12	12	6.8	1.4	5.2	非ロクロ
91	04	IVH14n	検出 I	灰釉	碗		4		2.4	4.2	
92	03A	IVG1l	SD13	長石釉か	丸碗		1		3.3	3.4	
93	04	IVH14n	検出 I	鉄釉	秉燭	3	12	4.8	4.05	4.0	使用痕あり
94	04	IVH14m	検出 I	不明	碗か	3	12	18.7	5.1	5.2	
95	04		検出 I	長石釉	練鉢	2		22.4	*3.3		
96	03C	IVH9e	SK87	土師質	焙烙	1			3.5		スス付着
97	04	IVH14n	検出 I	陶胎染付	皿		12		1.8	6.7	
98	04	IVH14n	検出 I	陶器	土瓶（蓋）	12		6.4	3.5		
99	04	IVH14n	検出 I	鉄釉	土瓶（蓋）	12		7.4	2.8		
100	03D	IVH12h	石溝トレンチ	灰釉	鉢		6		2.0	9.8	
101	04	IVH15n	検出 I	陶器	土瓶		2		4.0	8.4	スス付着
102	03A	IIIG15g	検出 I	鐵石か	玩具か			2.8	0.7	0.6	
103	03D	IVH12h	掘下	鉄釉	加工円盤			3.0	0.8	2.6	擂鉢片

総　括

調査範囲周辺は、近年までの耕作によって大幅な削平を受けていたが、比較的規模の大きい溝を中心に、古墳時代～近世の各時代の遺構・遺物が検出された。

＜古墳時代＞

03A ～ C 区の範囲で 5 世紀前半にさかのぼる土師器甕、5 世紀後半～ 6 世紀の須恵器の分布がみられた。散漫な分布ではあったが、周辺にはこの時期集落が展開し始めたと考えられる。03C 区において検出された一辺 10.5m 規模の方形区画は、判断材料に乏しいものの、古墳周溝の可能性もあり、集落周縁の墓域であった可能性が考えられる。

幅 14m 規模の大溝（04 区 SD01）が、7 世紀後半の段階には掘削されたと思われる。底面付近は土壌化がみられ、ある期間乾燥した状態で存続していたと考えられる。検出範囲では大溝は直線的にのび、北東の先は高木集落の中心、あるいは木曽川支流の旧河道につながる方向となる。また、反対の南西には前利（さきと）神社、斎藤（さいとう）集落が存在する。周辺の大規模な開発に伴い、集落間を結ぶような「切り通し」、通路として機能した可能性が考えられる。

＜古代＞

旧流路（03D 区 SD06）に重複する幅約 4 mの平安時代溝（SD04）は、灰釉椀、長頸瓶が出土し、周辺ではみられない黒色砂質土が埋積する。何らかの区画を構成するとみられるが、機能や性格等詳細は不明である。古墳時代末の大溝と調査区外でやや鋭角で交差する軸線をとる。大溝の廃絶時期を推定する材料となろう。なお、この方向は現在の地割と同様であり、扇状地の微高地の地形に大きく規制されている。

＜中世＞

大規模な溝は 13 世紀代にはほぼ埋没しており、僅かに残る窪みに集石（03D 区 SX01）が行われている。幅約 3 m の間隔をおいて平行してのびる溝（03C 区 SD20,24）からは、道が想定されるが、集石（03D 区 SX01）をさけるように逸れて続いている。調査範囲内ではこの付近に 14,15 世紀の中世施釉陶器が比較的多く分布しており、集石も含めて室町時代の人為的な遺構があった可能性は高い。しかし、全体に遺物量は少なく、居住域からやや離れた地点であったと思われる。

これまでにも遺跡周辺から出土したと思われる遺物（石器、土器、中世陶器）が扶桑町教育委員会に届けられるなど、遺跡の存在については地域でも関心がもたれてきた。今回の調査により、周辺には古墳時代をはじめとして、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代の集落の展開が予想されるようになった。扇状地という特徴的な地形の影響を含めて、今後の調査が注目される地域である。

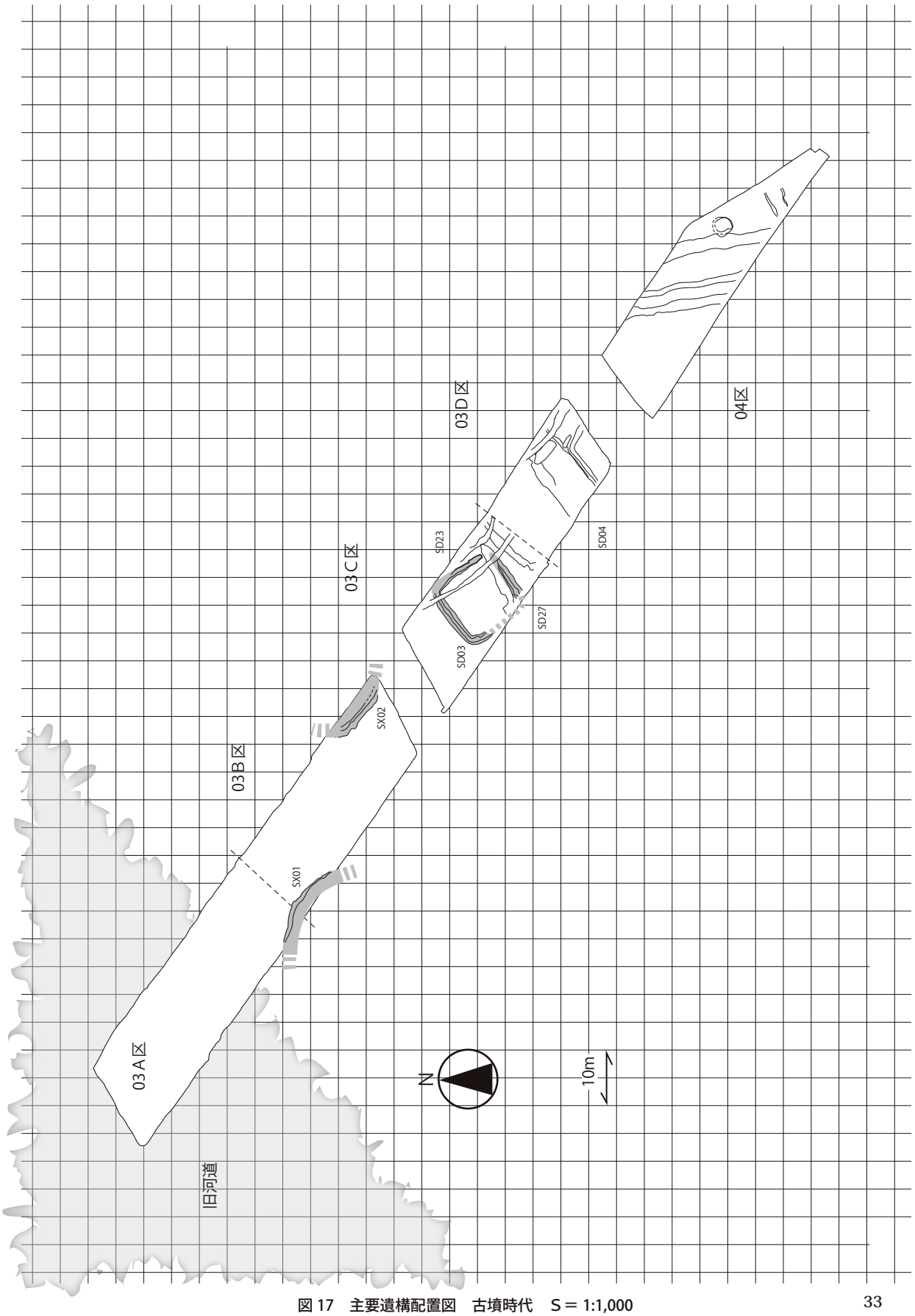


図 17　主要遺構配置図　古墳時代　S ＝ 1:1,000

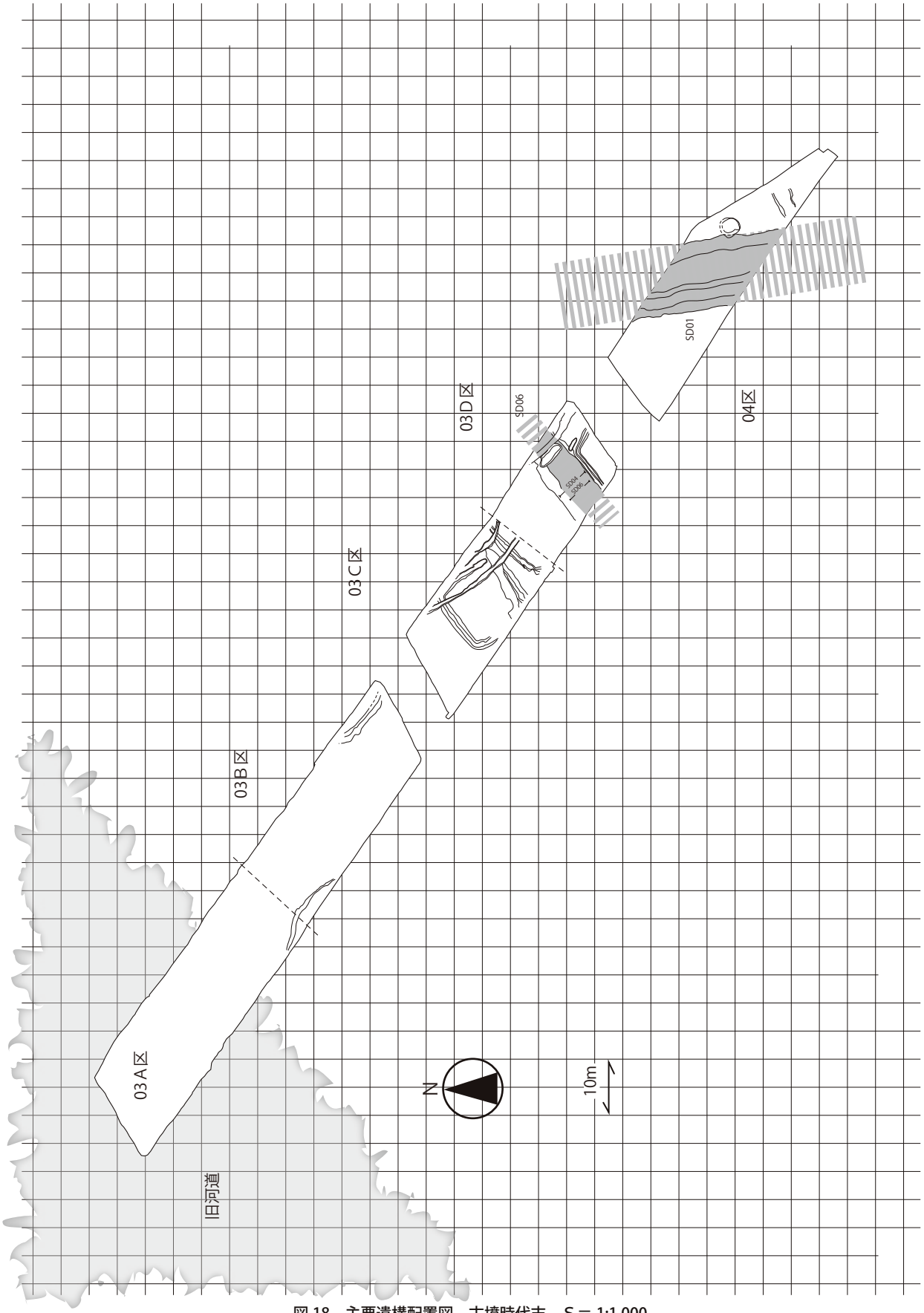


図 18　主要遺構配置図　古墳時代末　S = 1:1,000

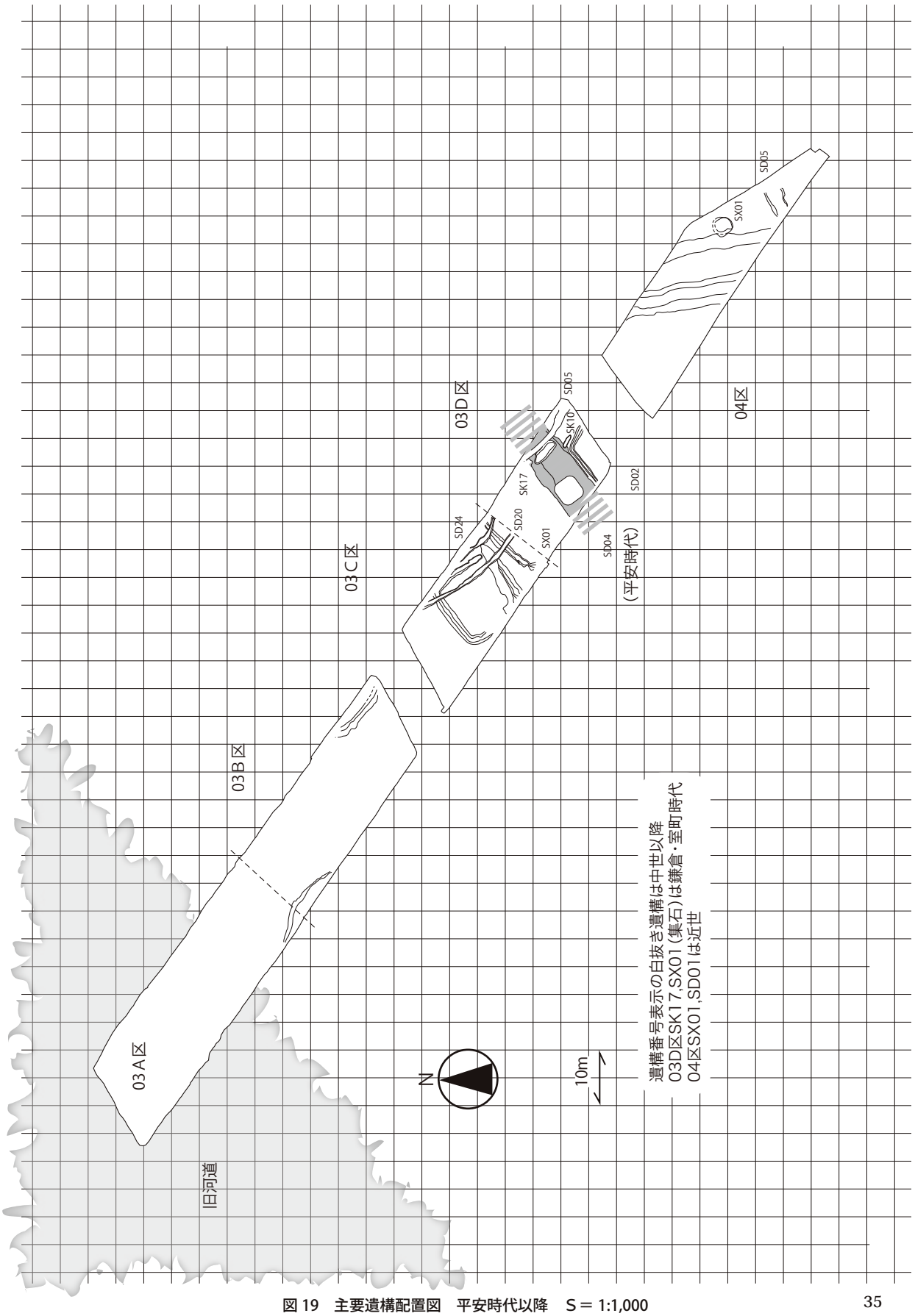


図 19　主要遺構配置図　平安時代以降　S＝1:1,000

付論　農作業における痕跡の観察

―扶桑町のイモアナ・扇状地における根茎類の保存方法の事例報告―

調査時にあちこちに確認できた方形土坑は、現在でも扶桑町で散見される根茎類を畑で保管するための土坑（以降、イモアナと称す）であったと想定されている。そして、イモアナは、現在もあちこちの畑で掘削され、利用されている。

方形土坑の掘削時の状況を把握するために、現在のイモアナについて報告する。なお、この事例報告は、扶桑町在住・今枝利彦氏所有の扶桑町大字斉藤の畑において 2004(平成 16) 年 11 月 8 日に実見したものである。

実見したイモアナは、サツマイモを収穫した後に翌年２・３月まで土中で保管するために掘削されたものである。大きさは、長方向は約 105cm、短方向は約 65cm で深さは約 90cm を測った。

掘削時には長方向に２ヶ所土留めを板で行い、掘削時の排土が流入しないようにした。掘削後、保温･防水のために周囲と底にワラまたはカヤ(最近はダンボールを利用する人もいるとのこと）を敷きつめる。その後にサツマイモを並べながら、バカヌカ（小麦のモミガラ）を周りにいれる。これは他のサツマイモや水分に触れることによって腐敗することを防ぐためのものである。それを何段に繰り返し、地上から 30cm のところまでサツマイモを埋める。そして、その上にバカヌカを地上から 5cm の所まで敷きつめて、さらに掘削土の残りで三角の山状に盛り土をする。その際に、空気の抜け穴として管を入れる。その口には石や瓦などで雨水が入らないようにしておく。この状態でサツマイモを保存しておくと、腐ることなく来年まで保存できる。ただし、バカヌカなどが腐敗するため、イモアナの再利用はできない。だから、ゴミ穴として廃棄され、翌年には少し位置をずらして同様なイモアナを掘りなおすとのことである。

このイモアナは、サツマイモだけではなく、サトイモの保存にも利用されるとのことである。大きさは、イモの量などに左右されるが、最低限作業しやすいスペースは確保するように掘削する。そして、畑の区画などに平行に掘削される。また上で紹介したイモアナの規模も、耕作者によって変わることがあるとのことである。

以上の事例報告には、今枝利彦氏の甚大なご協力を賜った。この場を借りて御礼申し上げます。

← 畑の中に掘られたイモアナ
畑の隅に収穫された根茎類を翌年まで保管するために掘削される。両脇に土留用の板がある。左手に見える梯子は、出入りに用いるためのもの。

↑　イモアナを短方向から見たもの
　大きさを比較するために、今枝氏に入っていただいた。

↑　イモアナの中の様子
　このようにサツマイモを並べていき、バカヌカをかけていく。

↑　三角状に埋め戻されたイモアナの盛土
　頂部に空気穴をふさぐ石・瓦が見える。

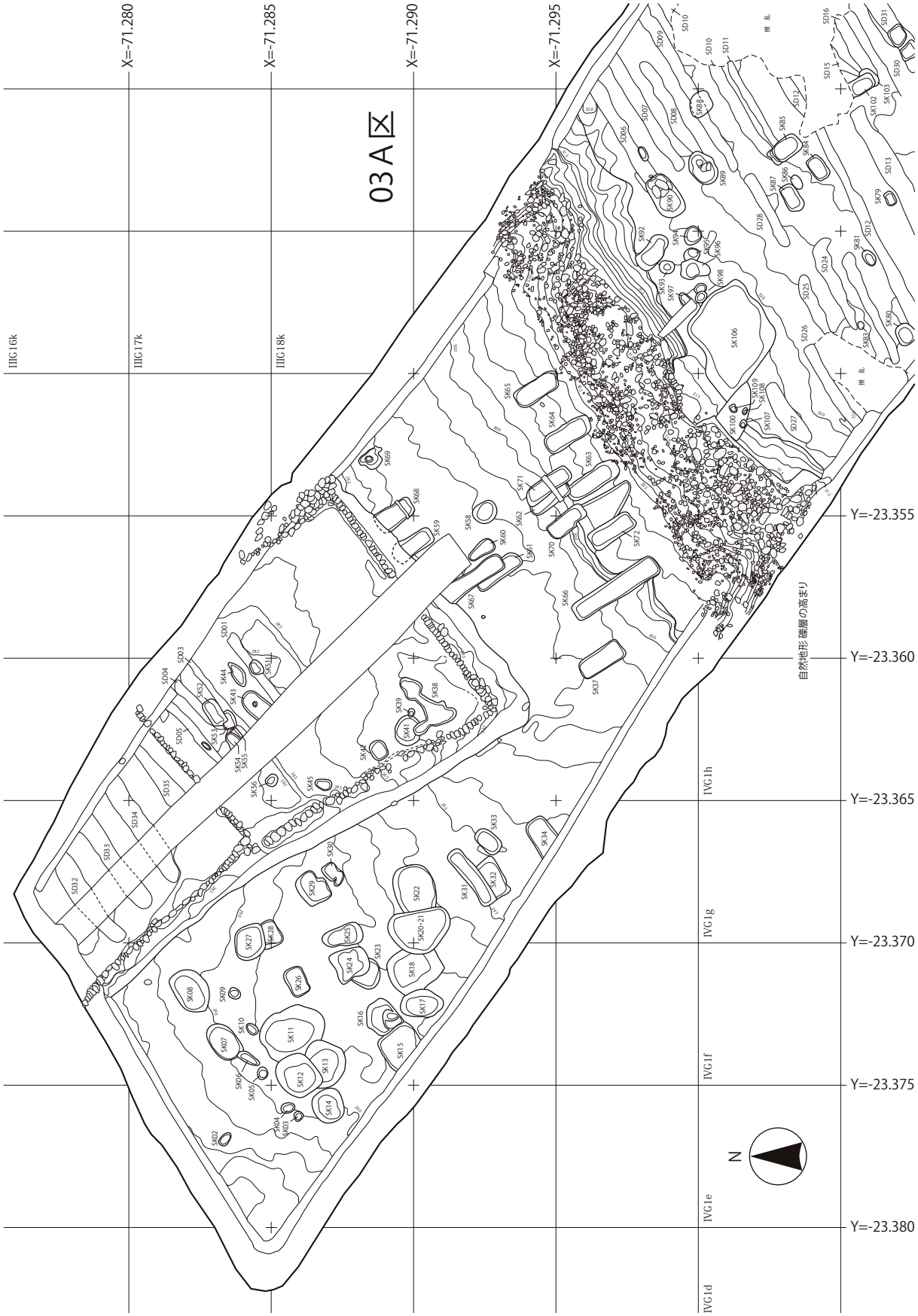
↑　周辺で見られたイモアナの盛土の例
　盛土の上にシートやイモのツルやトタン板などをかけておくことも多い。

←　瓦の下にある空気穴
　雨水浸入をふせぐために、石・瓦などを上に置く。極寒期はこの空気穴もふさがれる。

図　版

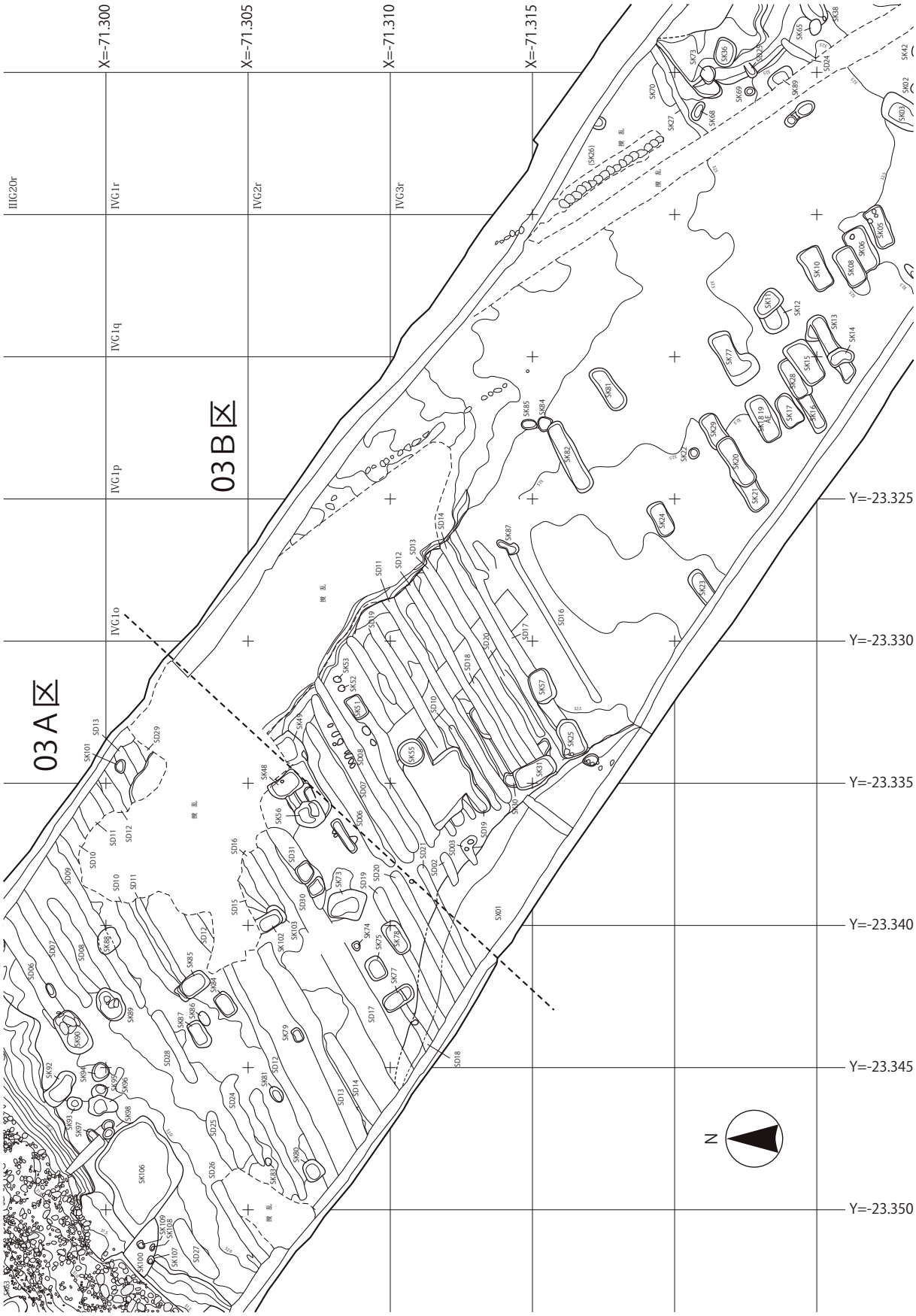
図版１～６
　　・・・・・・・・・・平面図 (1) ～ (6)　Ｓ＝１：200

写真図版１～８・・・・・遺構写真・遺物写真

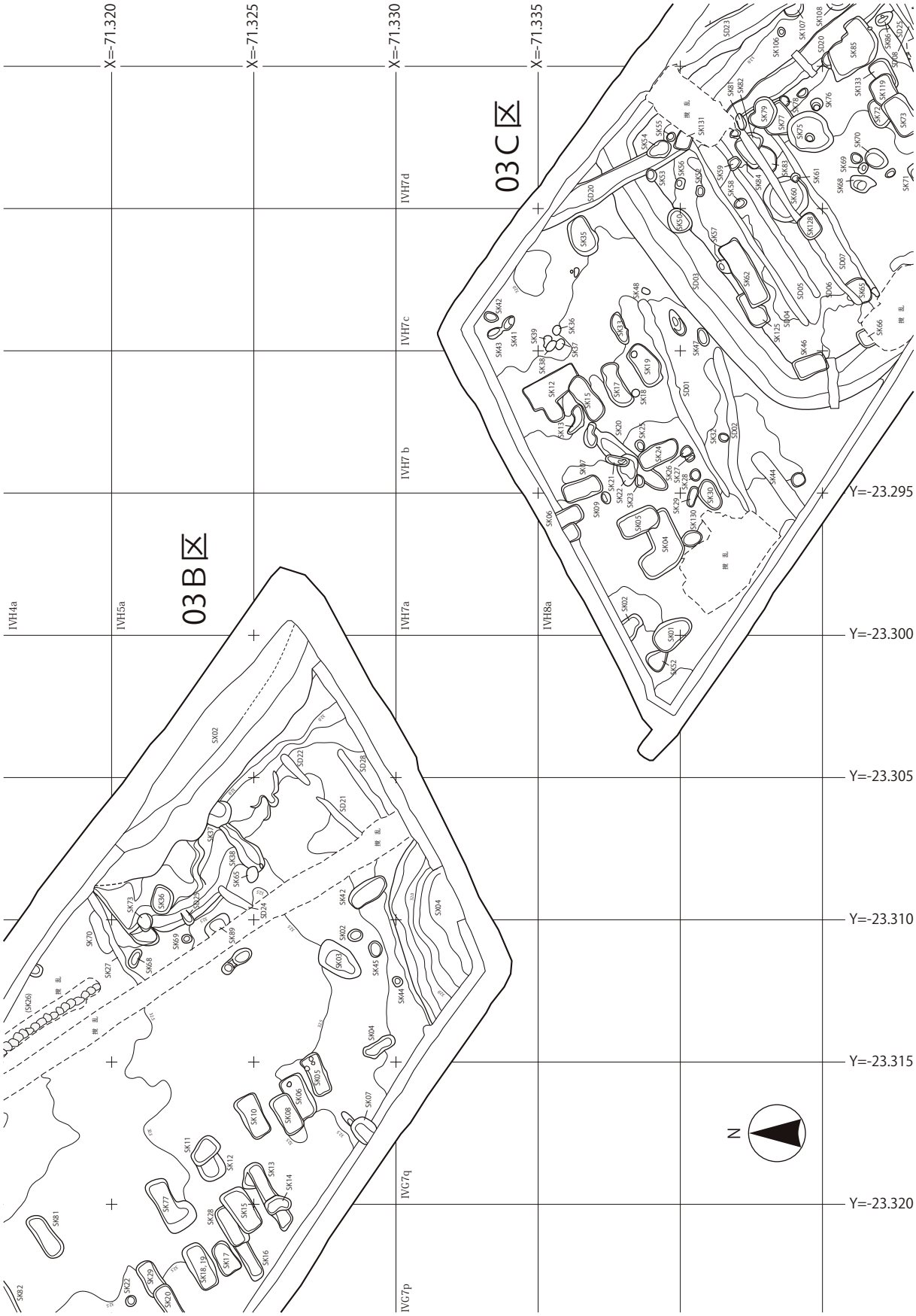

X=-71.280
X=-71.285
X=-71.290
X=-71.295
03A区
IIIG16k
IIIG17k
IIIG18k
Y=-23.355
Y=-23.360
Y=-23.365
Y=-23.370
Y=-23.375
Y=-23.380
IVG1h
IVG1g
IVG1f
IVG1e
IVG1d
自然地形 礫層の高まり
N

平面図 (1)　S＝1：200

図版2

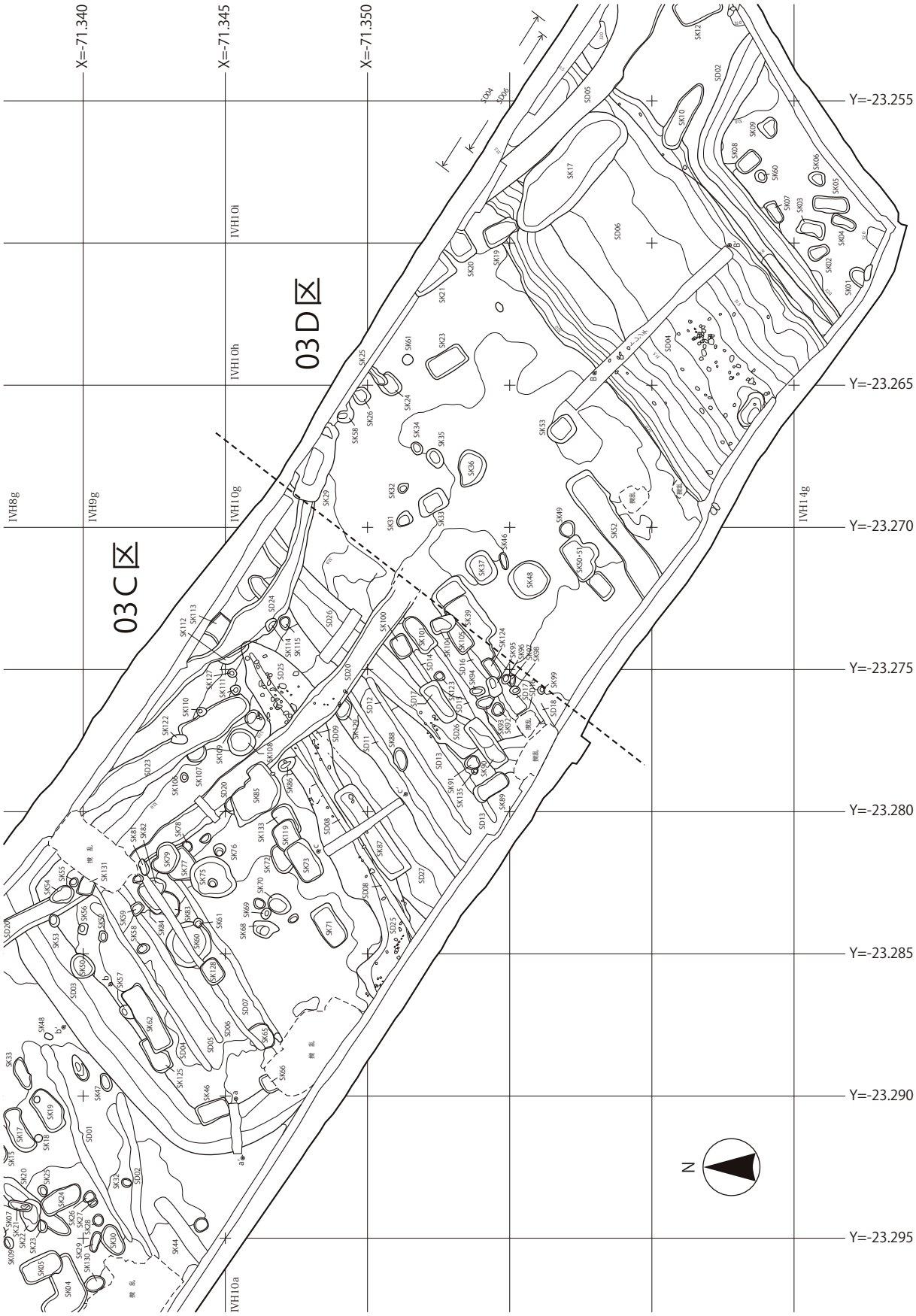


平面図 (2)　S＝1：200

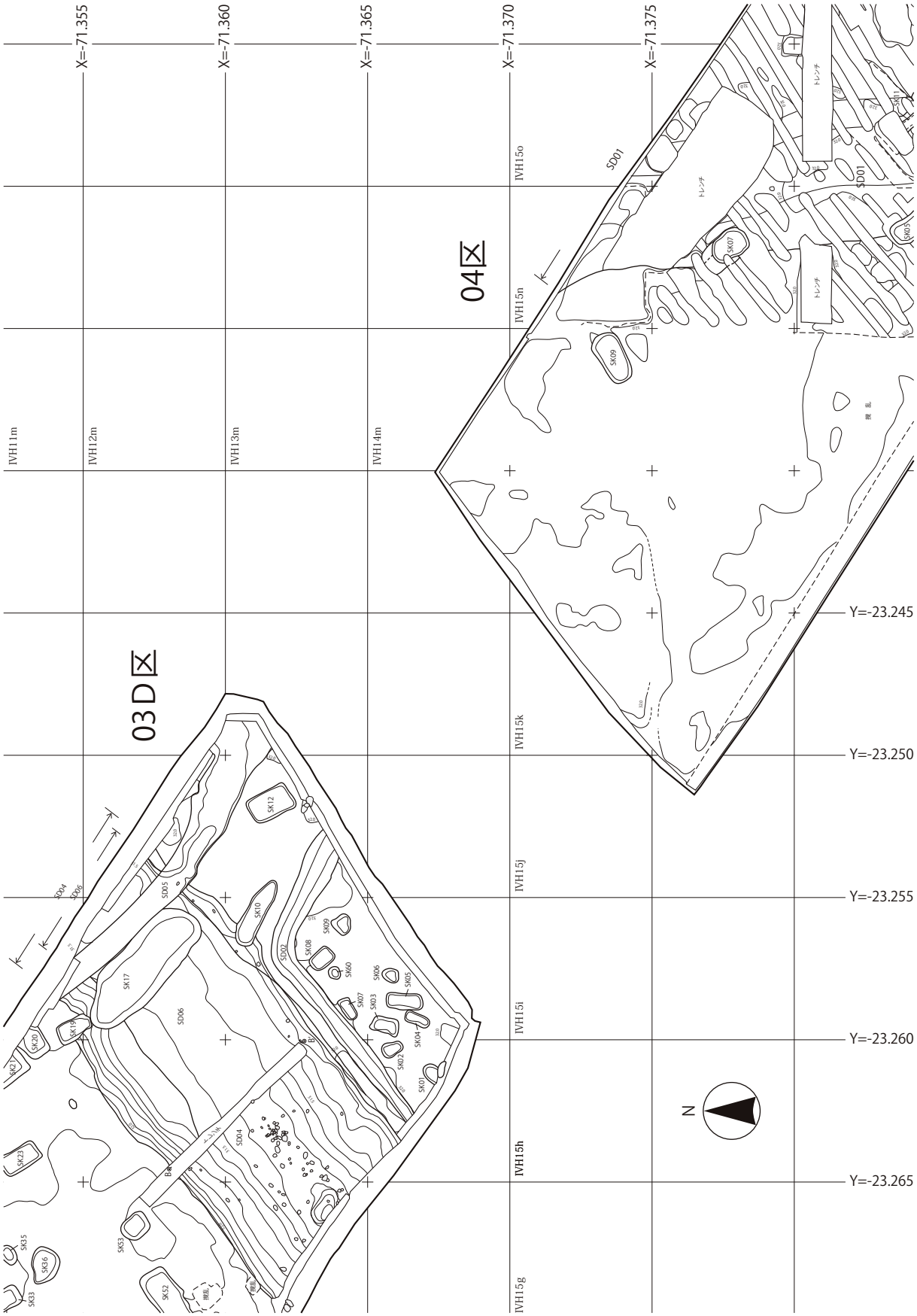

X=-71.320
X=-71.325
X=-71.330
X=-71.335
Y=-23.295
Y=-23.300
Y=-23.305
Y=-23.310
Y=-23.315
Y=-23.320
IVH4a
IVH5a
IVH7a
IVH8a
IVH7 b
IVH7c
IVH7d
IVG7p
IVG7q
03B区
03C区
N

平面図 (3)　S＝1：200

図版4

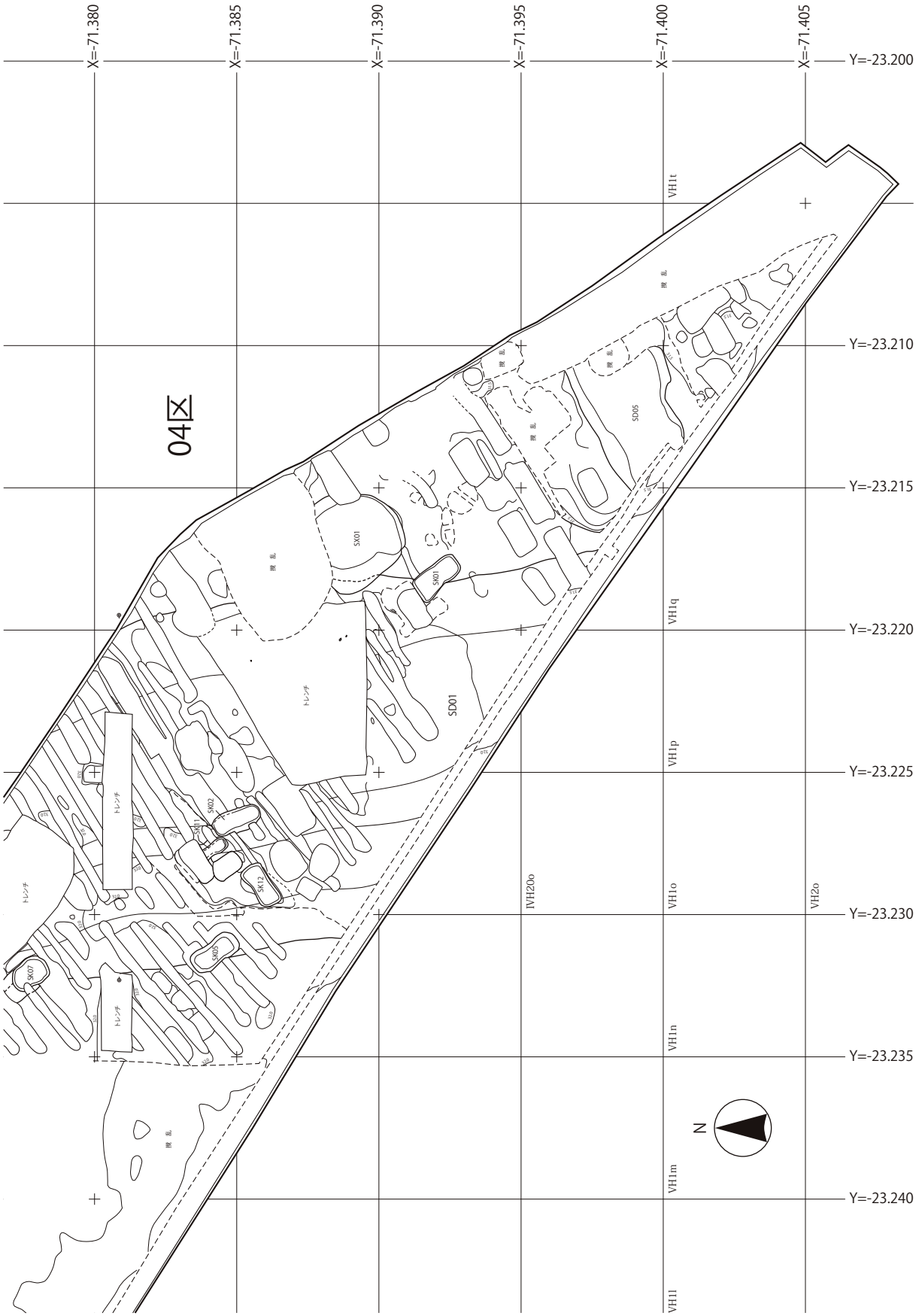


平面図 (4)　S＝1：200


X=-71.355
X=-71.360
X=-71.365
X=-71.370
X=-71.375
IVH11m
IVH12m
IVH13m
IVH14m
IVH15o
IVH15n
IVH15k
IVH15j
IVH15i
IVH15h
IVH15g
Y=-23.245
Y=-23.250
Y=-23.255
Y=-23.260
Y=-23.265
04区
03D区
SD01
SD02
SD04
SD05
SD06
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SK10
SK11
SK12
SK17
SK19
SK20
SK23
SK33
SK35
SK36
SK52
SK53
SK60
トレンチ
撹乱
N

平面図 (5)　S＝1：200

図版6



平面図 (6)　S＝1：200

写真図版1

03 A・B区全景（南東から）
上から 03 A区・03 B区

03 C・D区全景（南東から）
上から 03 C区・03 D区

写真図版2

上　04 区全景（南東から）

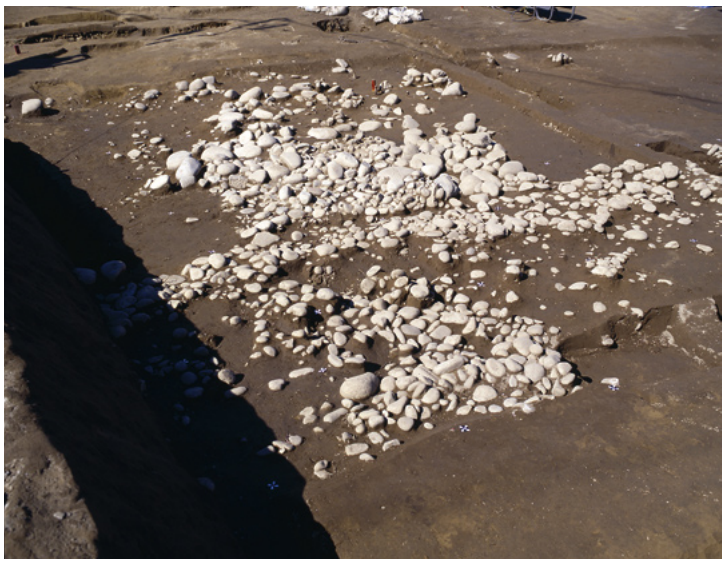
下　04 区 SD01（南から）

上　03C 区全景（北西から）

下　03D 区全景（南東から）

写真図版4

03B 区 SX04 土師器出土状況
（西から）



03D 区 SX01 検出状況
（南東から）

03D 区 SD04 完掘状況
（東から）

写真図版5

1　03C 区より南西方向を望む
2　03A 区より西方向を望む
　　（水田として残る旧河道跡）
3　04 区 SK12（南から）
4　04 区 SK01（北から）
5　03C 区 SK71（西から）
6　03C 区イモアナ断面（南から）
7　03B 区 SX04 作業風景（北から）

写真図版6

04 区 SD01 ベルト断面（南から）

左上　03A 区 SX01 完掘状況（北から）

左下　03B 区 SX02 完掘状況（南から）

右上　03C 区 SD25 完掘状況（西から）
右中　03C 区 SD26 ベルト断面（南西から）
右下　03C 区 SD03 ベルト断面（北東から）

写真図版7

1

2

10

23

写真図版8

9

18

13

14

41

35

29

48

47

46

93

ふりがな	たかぎいせき
書名	高木遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第146集
編著者名	加藤博紀　・　鬼頭　剛　・　武部真木
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802番24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかぎいせき 高木遺跡	あいちけんにわぐんふそうちょう 愛知県丹羽郡扶桑町 おおあざたかぎ 大字高木	23362	240013	35度 21分 34秒	136度 54分 27秒	2003.7.1～ 2003.11.30 2004.4.1～ 2004.5.1	2,750 850	県道草井羽黒線道路改築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高木遺跡	集落跡	古墳時代 古代 中世	方形区画溝・大溝 溝 集石・溝	土師器・須恵器 灰釉椀・長頸壺 中世施釉陶器	

文書番号	発掘届出(15埋セ第10号 2003.5.10／15埋セ第116号 2004.3.2) 通知(15教生第72-3号 2003.5.15／15教生第72-11号 2004.3.11) 終了届・保管証・発見届(15埋セ第74号 2003.11.18／16埋セ第25号 2004.5.31) 監査結果通知(16教生第824号 2004.8.4)

要約	本遺跡は、扇状地上における集落跡であり、今回の調査において、比較的規模の大きい溝を中心に、古墳時代～近世の各時代の遺構・遺物が検出された。古墳時代では、方形区画溝の存在から集落周辺の墓域の可能性が考えられる。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 146 集
高木遺跡
2007 年 3 月 31 日
編集・発行　財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
印刷　有限会社　アルケーリサーチ